Secret War―ひみつせん―

作　詩森ろば

2022.05.28 up

【登場人物】

●１９４２年

村田琴江	登沢研究所　タイピスト	三浦透子
市原和真	登沢研究所　研究者	坂本慶介
桑沢誠次郎	登沢研究所　研究者	宮崎秋人
伴野繁明	登沢研究所　２科責任者	松村武
山喜大悟	登沢研究所　研究者	森下亮
浦井静一	中野学校から派遣された将校	佐野功
織本ゆき	琴江の同僚タイピスト	北浦愛
古川伸子	琴江の先輩タイピスト	ししどともこ

●２００１年　北京

王浩然	中国の科学者	大谷亮介
津島遥子（村田琴江２役）	科学ジャーナリスト	三浦透子（二役）

プロローグ

無機質な空間に時代ものの椅子と机がいくつか置かれている。
物語はこの椅子と机を移動させながら進む。
真ん中に年代もののタイプライターが置かれた机と椅子
開始数分前からひとりの女性、村田琴江が座りタイプをしはじめる。
そこに、市原・桑沢・伴野・山喜・浦井が入ってきて、
琴江を取り囲むようにして立つ。

市原　わたしが登沢研究所で従事していたのは、主に動物の疫病実験でした。敵地の家畜たちに故意に感染病を流行させるためのものです。敵地での食料の枯渇が目的です。

桑沢　わたしは、新しい青酸化合物の研究に従事していました。無色透明、無味無臭のその薬物の目的は、もちろん毒殺でした。

山喜　わたしは2科で青酸化合物やペスト菌の研究をしていましたが、後に1科で風船爆弾の製作に配属されました。目的は敵地での感染症の人工的流行でした。

伴野　わたしは、彼らが所属した2科の責任者でした。細菌などを利用した生物兵器を開発していたのです。登沢はこの他、さまざまな軍事科学研究を行っていましたが、その全容はわたしにもわかっていませんでした。

浦井　わたしは陸軍中野学校から登沢に派遣されました。中野学校は、諜報機関、つまりスパイを養成するために設立されたものです。登沢は諜報活動のための兵器・武器の開発を目的に設立されており、中野学校とは深い関係にあります。わたしは、目的に適した研究のための助言と指示が仕事でした。もちろん彼らが迂闊に研究内容を漏洩しないための見張り役でもありました。

2022.05.28 up

今までタイプしていた琴江、すっと顔をあげる。

琴江　わたしは、登沢研究所でタイピストとして勤務していました。けれど自分が日々打ち込んでいるものが、毒物や病原菌の育成のための研究だと言うことは知りませんでした。わたしが登沢でそれとは知らず戦った戦争。それは、国の最高機密である秘密の戦争、秘密戦だったのです。

空襲警報がなる。爆撃音。見上げる琴江。
琴江がコートを羽織ると時代は２００１年　北京に移る。
研究者たち、退場。

シーン１　２００１年　北京・ホテルのラウンジ

人待ち顔で座っている津島遥子。
と、入ってくる王浩然。
立ち上がり、おじきをする遥子。
少し驚いた顔をするがそれを気取られぬよう、王、津島のところに来る。

王　やあ、お待たせお待たせ。あなたですよね。えーと。津島遥子さん。
遥子　はい。ありがとうございます。わざわざ。
王　わざわざはそっちですよ。北京にはいつ？
遥子　昨日です。よろしくお願いします。（王に）どうぞ。

遥子、席を勧める。
王、座る。遥子も座り。

遥子　（丁寧だが快活に）会っていただけないかと思っていました。
王　嬉しいですよ。日本人がわたしを訪ねてくるなんてことはまずありませんから。ましてやあなたのような若い女性が・・・。食事はしましたか？
遥子　いえ。まだです。
王　近くに美味しい餃子を食べられる店があるんです。蒸し餃子でね。どうですか。せっかくだからご一緒に。
遥子　餃子、大好きです。でも、少しここでお話聞いてからでもいいですか？
王　もちろん。
遥子　（席について）日本名をお聞きしてもいいでしょうか。
王　わたしの名前はひとつだけですよ。王浩然（ワンハオラン）。
遥子　わかりました。では王さん、登沢では何を研究してらしたんですか？
王　そう簡単には話せないことを研究していましたね。
遥子　数年前、登沢の貴重な資料が見つかったのはご存知ですか？
王　いや。ここにいると何の情報も入ってこない。
遥子　地元の高校生たちが自由研究で登沢のことを調査していました。それを知った登沢のタイピストだった女性が実は書類の複写を持ちかえっていたと名乗り出たんです。
王　・・・へえ。俄かには信じがたいな。登沢のものは進駐軍が来る前に何もかも処分したと聞いてますが。
遥子　その方は終戦まで働いて・・・お辞めになるときに記念に持ち帰りたいと当時の上司・・・伴野さんと言うんですが・・・伴野さんはご存じですよね。

2022.05.28 up

王　はい。２科の責任者でしたから。
遥子　そうです。その伴野さんに掛け合って許可されたそうです。
王　よく許しましたね。
遥子　そうですね。でも伴野さんも・・・・残したいという気持ちがあったんじゃないですか？
王　で、こんな５０年も経ってから名乗り出たと・・・。
遥子　ぜったいに秘密にするという約束で持ち帰ったので、ほんとうであれば出すつもりはなかったそうです。でも、丁度終戦から５０年という節目で、いろんな事実も出始めていた。出すことで何かの役に立つかもしれないと、悩んだ末に、名乗り出られた。ずっと大切に持ってらしたので、とてもいい状態でした。なので、貴重な資料として研究対象になっています。
王　そうですか。
遥子　村田琴江さんとおっしゃるんです。ご存知ですか。
王　・・・いや。そういう方は知らないですね。なにせ１０００人近い人が働いていましたから。どんな内容だったんだろう。興味があるな。
遥子　琴江さんがタイプしたという綴りには、とうぜんですが機密に関わるようなものはなにもありません。購入伝票とかそういう類のものだけ。
王　そうでしょうね。機密にかかわるものは将校立ち合いでしか打てなかった。
遥子　そうですね。けれど、調べてみると、その購入伝票の中にも研究の痕跡はあって・・・。
王　物騒なものがたくさん買われているでしょう。火薬・・・薬品・・・。
遥子　はい。多量の毒物が含まれていました。調べると登沢で作られた新しい青酸化合物、青酸ニトニールの原料となるものだとわかりました。
王　・・・科学は詳しいんですか。
遥子　大学では、化学（バケガク）を専攻したので。
王　物書きだと言ってましたよね。

遥子　科学系のライターをやっています。それで・・・その・・・これを機会にしっかり登沢のことを調べるべきだろうと思ったんです。

王　・・・・・・。

遥子　日本に戻らなかったのはどうしてですか？

王　戦犯として裁かれるだろうと思ったからです。怖気づいた。

遥子　ほんとですか？

王　あなた登沢がどんな研究をしていたかご存じでしょう。どこをどう切り取っても、敵国にとって嬉しい研究じゃありません。

遥子　けれど、実際は、登沢の研究者で裁かれたひとはいませんでした。皆さん、戦後の日本で錚々たるキャリアを築かれています。

王　結果はね。戦後復興に、科学は必要だ、そうアメリカは考えたんでしょう。

遥子　そうですね。

王　わたしは祖国を捨てた。名前も忘れた。話せることはないですね。

遥子　科学には国境も祖国もありませんよ。

王　・・・ああいえばこういうだな。油断ならないお嬢さんだ。

遥子　はい。でもそう思うんです。そうしなくちゃいけないって。そのためにも、登沢の話をちゃんと記録したいです。

王　・・・・・・。

遥子　お願いします。

じっと見つめる遥子。
目を閉じる王浩然。語りだす。

シーン２　１９４２　登沢研究所・図書室

図書館で調べものをしている市原。
そこに桑沢が入ってくる。市原を認めるとふっと顔が緩む桑沢。

桑沢　ひさしぶりだね。
市原　ああ。一度研究室に籠ると一日モグラみたいに実験してるから。君は？
桑沢　ここのところ図書室にこもりっぱなしだよ。でもだいたい骨子はまとまったから、そろそろ実験を始めようと思っている。
市原　ここにいると戦争しているなんてまったく実感わかないな・・・。
桑沢　仮にも軍人の身分で何を言ってるんだ。
市原　え。ああ（自分の軍服をチラッと見て）、こんな格好じゃ研究がやりづらくてかなわないよ。
桑沢　南洋のほうでは快進撃が続いているそうだね。
市原　新聞にはそう書いてあるけど・・・こんな小さな国が、アメリカ相手に・・・俄かには信じがたいよ。
桑沢　だから研究もね。しっかりやらないと。
市原　相変わらず、毒物の研究か。
桑沢　研究内容が言えないのはわかってるだろ。
市原　それにしてもアレだね。大学の同期と同じ場所で研究できると喜んだけど、ぬか喜びだったね。話をする機会もない。
桑沢　仕方ない。下手に話していると、怪しまれるからね。
市原　でも同じ科に所属していて、お互い微生物や細菌が専門なわけだから、研究している内容が近いのは確かだ。情報を交換したほうが効率的だと思うけどね。

2022.05.28 up

桑沢　まあそうだけど・・・・。
市原　仮にも科学の研究で、効率を最優先しないって、それこそ本末転倒だ。
桑沢　自由だな。市原は。
市原　桑沢がマジメすぎるんだよ。
桑沢　否定はしないけど。
市原　研究者同士でも話せないなんて、意味がわからない。人を疑ってかかりすぎだと思うね。
桑沢　お前、捕まるぜ。そんなことばっかり言ってると。
市原　でも、こんなことやってたら勝てる戦争も勝てないよ。資金力に大きな差がある。せめて（頭を差して）ここで勝たないと。
桑沢　だから・・・口を慎みたまえよ。
市原　口を謹んで研究が進むならいくらでも慎むけどね。

桑沢、答えず、あーあ、という調子で、本を広げる。

市原　（窓を差して）こんな早い時間に帰る人たちがいるね。
桑沢　（それを見やり）あのひとたちはタイピストの学校に通っているらしいよ。
市原　へえ。
桑沢　和文タイプを打てる人が圧倒的に不足していてね。だから早上がりして、新宿だかのタイプ学校に通ってるんだそうだ。
市原　なるほど・・・（時計を見て）5時からはじめたとしても帰りはそうとう遅くなる。ご苦労様なことだ。
桑沢　そうだね。頭が下がるよ。
市原　英文と違って和文はたいへんそうだな。

桑沢　文字の数がケタ違いだからね。欧米のものと同じ考え方では実現できなかったそうだよ。
市原　清書用にしかできないって言うよね。
桑沢　文章を考えながらどんどん打っていくなんて芸当はできなかろうな。志賀直哉が、せっかくこんな機械ができたのに、小説を書くのに使えないのでは意味がないと怒ってね、いっそ日本語をすべてローマ字表記にしてしまえ、と怒鳴り散らしたそうだよ。
市原　そりゃ無茶だ。読み方も音も同じ漢字が多すぎて意味がわからない文章になる。
桑沢　そうだね（窓をみやり）・・・それにしても、いいね。
市原　え。なにが。
桑沢　向学心に燃えているのがこんな遠くからでもわかる。あそこだけ色がついてるみたいじゃないか。
市原　へえ。
桑沢　何。
市原　いや。桑沢がそんなことを言うなんて珍しいな、と思ってね。
桑沢　そうかな・・・・。
市原　思い人でもいるとか。
桑沢　まさか。
市原　いいんだぜ。戦争でも恋くらいしたって。
桑沢　君はしたらいいさ。

将校の浦井が通りかかる。チラリとふたりを見る。

市原　さて・・・と。戻るかな・・・。
桑沢　・・・・ああ。

立ち去る市原。
残される桑沢。
窓の外を一瞬見やり、調べものを始める。

シーン3　1942　登沢研究所近くの路上

歩いている村田琴江と織本ゆき。タイプ学校の帰り道であるらしい。

ゆき　いいなあ。琴江さんは、覚えがよくて。
琴江　そんなことないわ。
ゆき　わたし、ちゃんと卒業できるのかしら。
琴江　できるに決まってるわ。
ゆき　どうしましょう。研究所のお金で行かせていただいてるのに、万が一にも落第してしまったら。
琴江　そうね。がんばらないとね。
ゆき　あーあ。やっぱりお断りするべきだったわ。計算は得意だけれど、漢字は苦手だから、タイピストは向いていないと思いますって、ちゃんと言えばよかった。
琴江　そんな。断るなんでできるわけないでしょう。
ゆき　面談で、無理ですって言えば、落とされたでしょう。倍率はたいへんなものだったって聞いているわ。わたしなんて、合格しなければよかったのよ。
琴江　それに受かったんですもの。自信を持たないと。
ゆき　２０００字もあるのよ。それをタテヨコ移動させて、文章を打つ・・・頭が爆発しそう。
琴江　でも、いちど手に入れたら技術はずっと自分のものよ。

ゆき　わたし、来年か再来年にはお嫁に行くの。家で決められているんです。造り酒屋で和文タイプなんて必要ないわ。
琴江　伝票を作ったりとか。
ゆき　手書きよ。帳面に。
琴江　それはそうだろうけど、技術は進歩する。造り酒屋だって例外じゃないわ。
ゆき　勇ましいのね。
琴江　え。そうかしら。
ゆき　世が世なら、あちら側の人だわ。
琴江　あちら側？
ゆき　研究する人ってことよ。
琴江　ああ。そうだったらどんなにいいでしょう。
ゆき　あら。やっぱり琴江さんは研究がしたいのね。
琴江　だって、お針も包丁もまったく好きじゃないのよ。女だって、家事より学問が向いている人はいるのよ。
ゆき　ええ。ええ。異論はありません。
琴江　わたし、こうやって勉強させてもらえるのが嬉しくて仕方がないの。
ゆき　わかった。
琴江　なに？
ゆき　琴江さん、タイプの複写の部分を残しているでしょ？
琴江　あら。気づいていたの？
ゆき　ええ。なにしてるのかなあ、って思ったら、残ったほうを箱の中に入れていたから。
琴江　一枚打ち込みするのにかかった時間とか、難しかったところを思い出すためとか、書き込みしてあるの。ちょっとした記録よ。

2022.05.28 up

ゆき　向上心がおありになるのね。そういう人がやるべき仕事なんです。わたし今日も、古川さんから叱られてしまって・・・・。

登場する古川。

古川　織本さん、間違いが多いのは、間違ってもいいや、と雑にしかものを見ていないからです。時間はかかってもいいから、正確に打つこと。いいですか？

古川退場。

ゆき　憂鬱だわ。また試験で点がとれなかったらなにを言われるか。
琴江　漢字だと思うから間違うのよ。数字は間違えないのでしょう。
ゆき　あら。確かにそうね。ソロバンは早いし、書き間違いもないわ。
琴江　だとしたら古川さんのおっしゃることも一理あるってことじゃあないの。自分は間違うと思っているから間違うの。
ゆき　そうね。余計なことに気を取られているからかもしれない。
琴江　ほら。
ゆき　また間違えるんじゃないかって緊張して、間違えるなんてそんなもったいないことはないわね。
琴江　その調子よ。
ゆき　少し勇気が出てきたわ。
琴江　ねえ。わたしたちがこうやってがんばれば、わたしたちの娘は、もしかしたらあちら側に行けるかもしれないわ。

2022.05.28 up

ゆき　そんな大それたこと。
琴江　何が大それてるっていうの。大正時代にはアメリカに渡って科学を勉強した女性がいたのよ。
ゆき　そういう人は特別よ。わたしは平凡。それでいいの。
琴江　ねえ。ゆきちゃん。ゆきちゃんはお酒を造るのでしょう?お酒だって科学なのよ。
ゆき　科学だなんて大袈裟ね。ただお米と糀をまぜて・・・・。
琴江　どうしてそれがお酒になるの？
ゆき　だから、発酵させて・・・。
琴江　発酵は科学よ。
ゆき　そうなの？
琴江　だって変化するわけだから・・・。
ゆき　そういえばお酒が美味しくなるように温度を計ったり、湿度を計ったりするわ。あれも科学ね。
琴江　そうよ。もちろん。
ゆき　そう思うとちょっと怖くなくなってきたわ。
琴江　そっか・・・・ゆきちゃんは、科学が怖かったのね。
ゆき　そうね・・・・。なんだか難しくて・・・・それにここで知ったことは家族にも話しちゃいけないって言われたでしょう。そんな恐ろしいことを研究しているのかしらって。
琴江　わかる気がする。
ゆき　え。ほんとに。
琴江　怖いからわたしはわかりたいと思うし、ゆきちゃんは、遠ざけたいと思うのね。
ゆき　でもいつか子供を産んだら、発酵は科学よって教えたいわ。
琴江　ええ。そうね。素敵だと思うわ。

ふたり、華やいで退場。

2022.05.28 up

シーン４　１９４２　登沢研究所　研究室

伴野、山喜、桑沢、浦井が会議中である。
表が机に置かれている。効き目が早い、遅い
障害を与える箇所が消化器系、呼吸器系、麻痺性、神経系、催眠系と
ふたつの見地から分類されている。

山喜　毒を作ることは、そんな難しいことじゃない。しかし、浦井さんがおっしゃるようなものを作るのは・・・。

浦井　もちろん難しいのは承知しています。

山喜　でも作れとおっしゃる・・・。

浦井　そうですね。

山喜　青酸カリのように、心臓麻痺に似た症状を引き起こすことができるもので、摂取してから時間のかかるもの、ですよね。

浦井　諜報活動に適した毒はできるだけ遅く効くものがいい。

山喜　・・・・しかも無色透明、水でもアルコールでも溶けて味がしない・・・。

浦井　はい。そうですね。

山喜　（表を指して）ここにはそんなものはないですね。

桑沢　戦争における毒物の使用はジュネーブ議定書で禁止されていますよね。

浦井　そうですね。無差別に攻撃するような科学兵器は明確に禁止されています。

桑沢　・・・なのに・・・いいんでしょうか。

伴野　桑沢くん・・・慎みたまえ。

桑沢　しかし・・・
浦井　議定書は、毒物による化学兵器の使用を禁止しています。しかし、研究や開発は禁止してはいません。
桑沢　それはもちろん知っていますが。
浦井　ということは、今、この時も他の国は、より効果的な化学兵器を開発しているということです。
桑沢　・・・・・・・。
浦井　科学を制するものが、この戦争を制します。出し抜かれるわけにはいかない。
桑沢　・・・・・・・・。
山喜　（紙を指して）ここにないってことは、新たに作らないといけませんね。
浦井　できますか。
山喜　条件に合うものを作るとすると、青酸化合物になりますが・・・。
伴野　まあ・・・そうなるね。
山喜　青酸化合物は無色無臭ですが、問題は味です。
伴野　独特の刺激があるからね。かなり味の濃いものに、うまく紛れさせないと・・・。
山喜　ほんの少しずつ摂取させれば、自然死に見せかけて殺すっていうのもできるとは思いますが・・・
　　そんな悠長なことをやっているヒマはないってことですから・・・。
伴野　何か可能性はあるかね。山喜くん。
山喜　そりゃ分解して青酸を発生するものを考えればできるとは思いますが。その何かっていうのがなあ・・・・。まあ根気強くやるしかないですね。ねえ。桑沢くん。
桑沢　はい。
浦井　ではさっそく取り掛かってください。

浦井、去る。

伴野　文献を手に入れる必要があるね。
山喜　図書室にあるんじゃないでしょか。桑沢くんは確かドイツ語が堪能だったよね。
桑沢　はい・・・。
山喜　頼んでいいかな。それで目星をつけて薬剤を購入してほしい。必要なものが揃ったら実験開始するから。
桑沢　わかりました。
山喜　それにしても、難しいことをこともなげに言いますね。青酸化合物で味がしないって・・・。
伴野　でも、できるんだろ。
山喜　助け船です。あの空気の悪さ。できます、と言うしかないでしょう。
伴野　助かったよ。
山喜　諜報教育を叩き込まれた精鋭だけあって、軍人らしく怒鳴ったりはしない分、妙な迫力がありますからね。
桑沢　すみません。
伴野　・・・そうだ桑沢くん、青酸化合物以外の可能性も調べてくれないか。
桑沢　そのつもりです。
山喜　さてと・・・仕事に戻ります。

去る山喜。

伴野　桑沢くん、どう使うか、もしくは使わないかは実行部隊の仕事だよ。わたしたちが考える事ではないよ。
桑沢　目的を考えずにやみくもに開発すればいい、というのは科学者として納得できません。

伴野　諜報活動に付属するものだ。目的なんて最初からわかっていることだろう。
桑沢　それはもちろん・・・。しかし・・・。
伴野　知らないことが自分の身を守ることもある。
桑沢　・・・・・・。
伴野　わたしに言えるのはそれだけだ。

去る伴野。

桑沢　・・・・・・・・。

シーン5　1942　映画館　→　喫茶店

映画を観ている琴江。少し離れた席に市原。
映画が終わり立ち上がり、出てきたところで出くわす。

市原　あれ。君・・・・。
琴江　え？
市原　あなた、もしかして登沢で働いているんじゃないですか？
琴江　え。
市原　じつはぼくも・・・。
琴江　え・・・あ・・・・。
市原　タイプの学校に行っているでしょう。
琴江　どうしてご存知なんですか。

市原　図書室の窓から見えるんです。
琴江　そうなんですか。
市原　映画なんて観るんですね。
琴江　大好きです。映画が観たくてお仕事してるようなものですわ。
市原　どうですか。コーヒーでも。
琴江　え。そんな・・・。
市原　感想を話したくないですか。
琴江　それは話したいですけど・・・。
市原　ぼくもそれに飢えてます。つきあっていただけますか。

ふたり、喫茶店に入る。向かい合って座る。

琴江　いい匂いですね・・・。
市原　最近ではどこも代用コーヒーしか飲めないけど、ここはまだホンモノを呑ませてもらえるんです。
琴江　どうでしたか。映画は。
市原　・・・・こんな映画を撮る方だったかしらって・・・・。
琴江　それはどういう意味で。
市原　こんな物資の乏しい時代に恐ろしいほどの大作で、素晴らしいとは思うんです。でも・・・。
琴江　同意見ですね。
市原　え？
琴江　忠義を尽くすことの意味を滔々と説教されている気分だった。
市原　そうなんです。人生を彩るような喜劇を撮る監督だと思っていました。
琴江　どうりで不入りなハズだな。それを期待していったらまったくの期待外れです。

琴江　ほんとうに。
市原　こんなあからさまな国策映画とは思いませんでしたよ。
琴江　・・・はい。
市原　この町ではまだ、どこに戦争があるのか、わからないくらいですが、そのうちにもっと色濃くなっていくでしょう。
琴江　そんなことおっしゃっていいの？
市原　だってそうでしょう。ニュース映画が必ずついてくるようになり、庶民が戦争を好きになるような文化映画も義務づけらました。
琴江　・・・・・。
市原　・・・・あなたも登沢で働いていたらわかるでしょう。
琴江　わかりません。
市原　意外ですね。
琴江　え？
市原　もう少し、現実的な方かと思っていました。
琴江　今日、初めてお話したんですよ。わたしの何を知ってらっしゃるっていうの？
市原　反骨精神がなければ、いまどき、女性がひとりで映画なんて観ないでしょう。
琴江　そんな・・・。
市原　褒めているんですよ。
琴江　・・・・ほんとうにわからないんです。だって、登沢で何を研究しているのかも知りません。新聞だって・・・女が読む必要はない、と言われて・・・夜中にこっそりロウソクの灯りで読むしかないんです。女は世間知らずと言いますが、そもそも世間を知るための材料がなにもないんですから。
市原　それは・・・確かにそうですね。だから映画を観るのでしょう。
琴江　・・・・・・。

2022.05.28 up

市原　ぼくだってそうですよ。あー。休日の楽しみを無駄にしたな。仕事のうっ憤を晴らせないまま明日からまた研究です。

琴江　やりがいのあるお仕事だと思ってました。

市原　やりがいはあります。これがなかなかにあります。

琴江　それなのに、気づまりなんてことあるんでしょうか。

市原　確かに、とても登れまいという山が、次々用意されています。退屈するヒマはありません。

琴江　羨ましいわ。

市原　ぼくはあなたたちのほうが羨ましいけれど。

琴江　え。どうしてですか。

市原　同僚が言っていました。毎日、窓の外をあなたがたが通ると、そこだけ、色がついているように見える、と。タイプを習うことが、楽しくてならないんですね。気持ちが前しか向いていない。

琴江　市原さんは違うんですか。お好きな研究を存分にやってらっしゃるのに。

市原　そうですね。夢中でやっています。でも夢中になる自分の心がね。なにかとてつもなく奇妙なものに思えることがある。

琴江　どういうことですか。

市原　そういう研究をしているところだってことです。

琴江　・・・・・・・。

市原　さっき言った同僚、大学の同窓なんですが、同じ2科にいるのですが・・・・。

琴江　・・・・はい？

市原　何かがくすんでいくんです。彼が本来持っていたあの美しい色彩が・・・・・。

琴江　・・・なんだか、残酷ですね。

市原　好きなものに近いからこそ、心がだんだん疲れていく。科学者だけじゃない。さっきの映画だって作るひとの心持が変わったからああいう映画になるんです。

琴江　・・・それは・・・わかります。戦争なんですね。ここにいると・・・なんだかそんなかんじはしないれど・・・確かに、戦争が起こっているんですね。映画から・・・戦え、戦えって、声がするような気がしました。

市原　画家の絵が暗くなり、作家の言葉が勇ましくなる。

琴江　そして研究者の顔色がくすんでいく・・・。

市原　濃くなっていくのは戦争だけです。

琴江　市原さんはどうして科学の道を？

市原　・・・村田さんは寺田寅彦を知ってますか？

琴江　・・・存じてます。それが科学を学ぶきっかけですか。

市原　寺田先生の子供むけの本があって、夢中になりました。どんな混雑する時間帯でも空いている電車があって、それを待って乗るようにしているという他愛ない話が、なんで空いているのか数学的に考察されはじめたりして・・・。

琴江　わたしも、大好きです。その話。

市原　え。読んでいるんですか。

琴江　はい。父が兄に買い与えたのですが、夢中になったのはわたしのほうでした。目算が外れて父はガッカリしてましたわ。

市原　・・・・へえ。愉快だな。

琴江　ずっと不思議に思っていたいろいろが、科学という方法なら解明できると知って、もっと知りたいと思いました。でも・・・女が上の学校なんてとんでもないといわれて・・・。

市原　・・・・そうですか。

2022.05.28 up

琴江　なのに兄はせっかく行った大学を途中でやめてしまったんです。わたし、悔しくて。
市原　それは・・・確かに悔しいですね。
琴江　だからわたし、しばらく兄と口を利きませんでした。なのに叱られるのは兄ではなくてわたしなんです。理不尽だと思いませんか。
市原　・・・・面白いひとですね。村田さんは。
琴江　その言い方、女と思ってバカにしていますか。
市原　そんなつもりは・・・・。
琴江　だってわたしが規格外れだと思って言った言葉でしょう。女はこうだと決めつけているからそういう言い方になるんだわ。
市原　確かに。
琴江　え？
市原　女性には向学心なんてものは備わっていないものとどこかで思いこんでいた。今の今まで。でも打ち砕かれました。これからは、そんなことは金輪際思いません。
琴江　市原さんこそ、面白い方ですね。
市原　そうですか？
琴江　そんなこと言う男の方、初めて会いました。
市原　そうかな。
琴江　ええ。あの。
市原　なんですか？
琴江　そろそろ帰らないと。
市原　・・・そうですね。帰りましょうか。

ふたり、帰り支度をする。

2022.05.28 up

シーン6　1942　割烹旅館　紀の屋

暖簾をくぐって入ってくる伴野と山喜。

古川　いらっしゃいませ。
伴野　ああ。古川くん。
古川　お待ちしておりました。
山喜　もしかしてここは古川さんの家がやっているの？
古川　はい。母が・・・・。
山喜　昼は登沢で働いて、夜はここか。ご苦労様だね。
古川　いえ。今日だけ人手がなくてお手伝いしているんです。
山喜　なるほど。
伴野　予約をしてあるんだが・・・。
古川　こちらです、どうぞ。離れなので、人に話が聞こえることもありません。
伴野　いやいや。極秘会議はこんなところではしないよ・・・。
古川　やだ。そんな意味ではないんですよ・・・・。寛いで過ごしていただきたいって母が。
山喜　ありがたいね。ゆっくりさせてもらうよ。

古川、ふたりを座敷に案内する。

古川　日本酒の準備があります。そちらでよろしいですか。
山喜　ああ。ありがとう。ありがとう。

古川、去る。

山喜　いい店ですね。
伴野　あれ。山喜くんは紀の屋ははじめて。
山喜　ええ。筋金入りの出不精ですから。
伴野　まああれだけ熱心に研究していたらね。
山喜　できたら研究室に住みたいくらいです。でもたまにはいいですね。
伴野　ひさしぶりだな。君と飲むのも。
山喜　でも、そろそろこういうところで呑むこと自体できなくなるのではないですか。
伴野　ああ。そうかもしれないね。いまだって軍の人間くらいではないか。ここを利用しているのも。
山喜　たぶんそうでしょうね。
伴野　進捗はどうだね。
山喜　一筋縄ではいきませんねえ。
伴野　まあそうだろうね。
山喜　あの浦井さんって人はほんとうに食えないひとですね。そうできるならとっくにそうしてますってことばっかりしれっと言ってくる。でもいちいち的確ですからね。言い返せない。
伴野　中野学校の生え抜きと聞いている。ただものじゃないよ。
山喜　そうでしょうね・・・。
伴野　桑沢くんの様子はどうだね。
山喜　どうって、しっかりやってますよ。元気に満ち溢れている・・・とは残念ながら言えませんが。まあ毒物の実験ですからね。はしゃいでやってたらむしろおかしいでしょう。
伴野　ならいいが。マジメが服を着て歩いてるような男だからなあ。

山喜　ほんとですね。このあいだ、ついうっかり、わたしの好きな言葉は『完全犯罪』だ、と言ったら、驚いていましたね。

伴野　おいおい。穏やかじゃないな。

山喜　だって、浦井少佐が所望してるのはそういう毒ですよ。

伴野　そりゃそうだが。

山喜　シャーロック・ホームズに夢中な子供だったんです。まだらの紐なんて最高ですね。いいじゃないですか。毒蛇が犯人・・・。実に夢がある。

伴野　でもね。そんな通気口みたいな穴から入れるような小さい蛇で人を殺せるかっていうと・・・無理じゃないか。例えばマムシの致死率は０．１パーセントくらいだよ

山喜　さすが知ってますねえ。

伴野　わたしも探偵小説は嫌いじゃない。しかし科学者のサガだね。トリックが可能かどうか、どうしても検証したくなる。

山喜　そういう読み方したら驚くほど穴だらけですよ。とは言えやってしまいますよねえ。

伴野　だいたい牛乳を飲む蛇なんているか？聞いたことがないよ。

山喜　しかも口笛であやつるって・・・適当すぎます。

伴野　しかも噛まれてから１０秒で絶命するんだろ。

山喜　もしほんとにそんな蛇がいたら、苦しむ時間が少なくていい。殺される人にとってもなかなか優しい暗殺者です。

伴野　酷いいい草だな。・・・あれ。なんの話をしていたんだったか。

山喜　桑沢の話ですよ。

伴野　ああ。そうだ。そうだ。

山喜　大丈夫でしょう。あいつだって科学者ですから、こういう話、ほんとは好物なハズなんだ。

伴野　ならいいが・・・。

山喜　やや線が細いのは確かですが・・・でもぼくにとって最高のワトソンでもありますから。
伴野　ワトソン？ああ。助手だ。ホームズの。
山喜　はい。優秀でね。控え目で誠実で人がいい。あとメモ魔で几帳面です。
伴野　なるほど。
山喜　なので完全犯罪に向けて２人三脚で頑張りますよ。

と、古川が燗を持ってやってくる。

古川　お待たせ致しました。
山喜　おお。これは、ずいぶんよさそうな香りがするな。
古川　懇意にしている酒蔵があって、譲ってくださったんです。いいものらしいですよ。
伴野　へえ。それは楽しみだ。

山喜と伴野、注ぎ合い、口をつける。

伴野　これは、旨いね。
古川　そうとう上等のものだろうって。
伴野　そんなものを出していただいて・・・お礼を言っておいてください。
古川　わたしの直属だと言いましたら、とっておきを出してくれました。
山喜　近頃では混ぜ物してない酒はなかなか飲めないと聞くね。ありがたいよ。
古川　登沢の方たちの中には、エチルアルコールに混ぜ物をして、呑んでらっしゃる方もいるそうですよ。
　　でもさすが科学者ですね。なにか秘訣があるらしく、そこそこ美味しい酒になるんですって。
山喜　ははあん。何か添加物を入れたね。なんだろうな・・・。アルデハイド・・・コハク酸・・・・。

2022.05.28 up

伴野　味の素ってこともありえるな。
山喜　はいはい。そうですねえ・・・。

添加物の名前をいくつか言い合うふたり。華やいだ雰囲気になる。

シーン7　２００１年　北京・ホテルのラウンジ

むきあっている王と津島。

遥子　ずっと、科学のお仕事を？
王　それ以外にできる仕事はなかったですね。なにしろ中国語もロクに話せなかったんだから。
遥子　やはり・・・秘密の研究ですか。
王　切り込みますね。しかし、研究ってのはどんな研究でも秘密ではありますよ。違いますか。
遥子　それはそうですけど。
王　戦争のためと言われてやっているわけではありません。でも、結局どんな研究でもやり方次第で転用していける。登沢にいた人で疑義を唱えるひとはいないでしょうね。あなたも科学を学んでたんならわかるでしょう。
遥子　・・・それは、はい。
王　そしてこの国はね、徹底的にやる性質に加えて、外交的にも我が道を行く国ですから、どこにも忖度せずに突き進むことができる。
遥子　秘密戦を戦い続けているということですか。
王　そこまでは言いません。しかし、やるなら徹底的にというのがこの国の流儀です。わたしも、その凄みの一端を目の当たりにしてきました。

2022.05.28 up

遥子　・・・あと２０年・・・いえ、１０年かけずに科学立国という言葉は、この国のためのものになるかもしれませんね。
王　そうそう。小さな島国の日本が、世界と戦うための言葉だったのに、こんな巨大な国にそれを名乗られてしまっては・・・。
遥子　（外をみやり）この先の広場で・・・民主化を望んだたくさんの人たちが血を流したんですよね。
王　そうですね。とは言え、その事件の名前はここでは言わないほうがいい。
遥子　・・・はい。研究にもいろいろ影響が？
王　わたしは、研究の傍ら、大学で教えています。教え子が幾人も亡くなっていますね。
遥子　ここで、起こったことの地続きで、科学が発展する。少し、怖ろしい気がします。
王　変わりませんよ。
遥子　え。
王　どこの国でもいっしょです。日本でもアメリカでも・・・。
遥子　・・・王さんは、科学の平和利用を信じてらっしゃいますか。
王　信じていたら、あのとき、日本に戻っていたでしょうね。
遥子　それ、どういう意味ですか。
王　戦争に負けたくらいのことで、何かが変わるとは思えなかったんですよ。
遥子　えーと・・・。
王　あの時、登沢で熱に浮かされたように研究した。あの熱が敗戦くらいのことで冷めるとは思えなかった。なのに、戦争の責任を取らされるなんて、理不尽だと思ったんですよ。
遥子　・・・確かに、そうですね。負けたけれどもせめて科学で、せめて経済で、そうやって日本は発展してきましたから。
王　津島さんは、どうですか。科学を平和利用にしか使わない自信はありますか。
遥子　わたしは・・・平和利用はあると信じて科学を勉強していました。環境負荷の少ないプラスチック

を生成する技術です。ホワイトバイオっていうんですが・・・。

王　専門ではないが・・・もちろんわかりますよ。

遥子　でもほんとに環境のことを考えるなら、そもそもホワイトバイオを選んだ時点で矛盾してますよね。

王　そりゃあそうだ。プラスチックが環境に悪いものなら、プラスチック自体を諦めればいいのに往生際悪く環境にいいプラスチックって・・・。

遥子　なんとしても人って後ろには進めないものなんですね。

王　あなたはできますか？プラスチックなしの生活は。

遥子　（持っているボールペンを見せて）無理ですね。

王　（苦笑する）

遥子　産業と産業が見張りあっているのがいまの社会ですよね。プラスチックは環境問題として考えても、エネルギー問題として考えても、ぜったいによくないのはわかってる。でも禁止にできないのは、プラスチック産業で食べてるたくさんの企業があるからです。

王　（ボールペンをさして）そしていまさら、プラスチックなしでは生活できない。

遥子　考えれば考えるほど、何が正解なのかわからなくなります。

王　そんなの考えるだけバカバカしい。科学は便利だし、なかなか役立つ。でもリスクもある。というかリスクまみれだ。

遥子　でも考えてしまうんです。

王　そんなことはとっくにわかってることで今更考えるようなことじゃない。正解がもしあるとしたらここで歩みを止めること。それしかないでしょう。

遥子　気持ちいいくらいの正論ですね。

王　だってそうですよ。もしほんとに環境が大切なら、金輪際、科学には近づかないことです。それがどっちも欲しいって・・・ダダこねてる子供と変わりませんよ。

遥子　それができないならしのごの言うべきじゃない。そうおっしゃりたいんですね。。

王　世界中どこでも飛行機で行けて、持ち歩きできる電話までである。もう十分でしょう。
遥子　でも王さんはしのごの言わないほうを選んだんですよね。科学を続けていくことを。
王　そうだね。明日も明後日も、発展しつづけるほうを。
遥子　・・・続きをお聞かせください。

王、遥子の上着を脱がせ、退場。

シーン８　１９４２　登沢研究所

琴江とゆきが仕事をしている。
声をかける古川。

古川　村田さん。ちょっとお話いいかしら。
琴江　はい。なんでしょうか。
古川　こちらで。

人のいない部屋に呼び込む古川。

古川　村田さん、このあいだのおやすみ、どこにいってらした？
琴江　映画に参りました。
古川　おひとりで？

琴江　はい。ひとりです。
古川　わたし、家のお使いで、お届け物に行ったのよ。それで偶然、村田さんをお見かけして・・・声をかけようと思ったんだけど・・・。
琴江　え・・・あの。もしかしたら、市原さんのことですか？
古川　出過ぎたことを言っているのはわかっているのよ。
琴江　・・・映画館でお会いして声を掛けられたんです。
古川　喫茶店に行かれたでしょ？
琴江　え・・・・？
古川　見張ってたみたいでごめんなさい。誤解しないでほしいんだけど、会うなと言っているんじゃないのよ。でも、あの場所は人目につきすぎる。
琴江　疚しいことなんてありません。だから人目についても大丈夫だと思いました。
古川　あんなところを見られたら、仕事をやめさせられかねない。それが心配なの。
琴江　・・・・。
古川　わたしのところでぜんぶとめておく。科長にも、ましてや浦井少佐にも言ったりしません。だから・・・。
琴江　ご心配には及びません。もう二度とありませんわ。
古川　ならいいのよ。いま、村田さんがいなくなったら仕事が立ち行かなくなる。困るわ。
琴江　はい・・・。
古川　よく話されるの？市原さんとは。
琴江　いえ。わたしのほうは顔も知りませんでした。
古川　それなのに、喫茶店に行ったの。迂闊だわ。村田さんらしくない。
琴江　映画の話がしたかったんです。
古川　・・・。

琴江　面白い映画であれば行かなかったかもしれません。大好きな監督なのに、なんだか納得がいかなくて・・・それで、話したいと思ってしまったんです・・・・。
古川　そうなのね。
琴江　古川さん、映画は・・・。
古川　戦争が始まる前に一度か二度。
琴江　そうですか。
古川　とても行く気になりません。
琴江　どうしてですか？
古川　だって・・・映画なんかにウツツを抜かしていたら、勝てる戦争も勝てない気がして。
琴江　そうでしょうか。
古川　どういう意味。
琴江　・・・・関係ありますか？
古川　え。
琴江　わたしたちが何かをガマンしてもしなくても、勝つときは勝つし負けるときは負けるのではないかって。
古川　・・・ねえ。村田さん。
琴江　はい。
古川　いま、女に許されているのは、銃後の守りだけ。それはわかっているわよね。
琴江　・・・・望んだわけではありません。
古川　それでもよ。
琴江　・・・・・・。
古川　でもね。その中でもだいぶ前にほうに、わたしたちいるわ。銃が見えるか見えないかの場所に。
琴江　それは・・・・はい。

2022.05.28 up

古川　そこをしっかり守らないと、次の女性たちはもっと後ろに行かされる。
琴江　・・・・・・・。
古川　世が世なら、女だって、珈琲くらい飲んだっていいんです。男の方と連れ立って出かけたって・・・。
琴江　・・・・・・・はい。
古川　・・・村田さんだから思い切って言うわね。
琴江　なんでしょうか。
古川　・・・・どんなに前まで行っても、銃なんて見えなければいいとわたしは思ってる。だから、いまは耐えてほしいの。
琴江　・・・・。はい・・・・。
古川　仕事に戻りましょう。

琴江、じっと考えている。
と、織本ゆきが待ちかねたように、琴江に話しかける。

ゆき　琴ちゃん。お話ってなんだったの？
琴江　なんでもないわ。
ゆき　珍しいわ。琴ちゃんが注意を受けるなんて。
琴江　たいしたことじゃないのよ。
ゆき　でも古川さん、あの顔をしているときはなにか注意をしようとしているときだもの。
琴江　そういうこと言わないの。
ゆき　間違いないわ。わたし、いつも叱られているからよくわかるの。
琴江　ねえ。ゆきちゃん。わたしたち古川さんのこと、誤解していたかもしれないわ。
ゆき　え。誤解？

琴江　ゆきちゃんは珈琲を飲んだことある？
ゆき　あるわ。父が好きなの。
琴江　わたしこのあいだはじめて飲んだの。
ゆき　美味しかったでしょう？
琴江　苦かったわ。香りは素敵だったけど。
ゆき　でも、何度か飲んでいるうちにあれがやみつきになるのよ。
琴江　そうなのね。
ゆき　そうなの。不思議よね。

シーン９　１９４３　登沢研究所　会議室

伴野、浦井、市原が話している。
市原からとある重要な実験の報告がされているらしい。

市原　牛疫に感染した牛のリンパから取り出した病原体。早速、実際の牛で実験してみました。
伴野　実験方法は？
市原　最初は口腔内、つまり口のなかに注射器で噴霧する方法をとりました。なんどやってみても陰性でした。
伴野　へえ。口の中に直でも陰性なのか・・・。で？
市原　なので、次に毛のうえから病原体を塗ってみました。さかんに舐めていましたがやはりどこまで行っても陰性でしたね。
伴野　ふうん。つまり、経口摂取では発病しないということか。
市原　そうですね。取り出した病原体がそもそもダメなのか、経口摂取では発病しないだけなのか、取り

出し方を変えたり、量を変えたりして、実験を繰り返しましたが、よくわからないままでした。しかし、先日、ふと思い立って、鼻腔内、つまり鼻のなかに直接噴霧してみたんです。

伴野　どうなった。

市原　はい。数日後、牛は発熱しました。そして、典型的な牛疫の症状の後に、死に至りました。

伴野　なるほど鼻の粘膜から、感染するということか。

市原　そうですね。そして、ここからが本題です。実は、１００メートル離れた細菌部で、牛、１０頭が、牛疫の症状が出てすべて死亡したんです。

浦井　その報告は受けていますが・・・え。今回の実験と関係があるんですか。

市原　はい。おそらく。

伴野　感染経路は？

市原　わからないんです。病毒部と細菌部の間に人の交流はありませんから。

伴野　偶然ということは？

市原　考えづらいですね。

浦井　でも、１００メートルの距離があるんですよね。

市原　そこなんですよ。人の交流があれば、もちろんありうる話なんですが。

伴野　ということは・・・製造過程で、菌が漏れたのではないか。

市原　はい。その可能性がいちばん濃厚ですね。

伴野　気を付けてくれよ、と言いたいところだが、目に見えないものを扱っているから・・・。

市原　そうですね。実験の際はかなり気を付けていますから、いつそんなことになったのか・・・・。

伴野　でも体に塗布しても発病しなかったものが、細菌部では１０頭まとめて病気になったということはけっこう大量だね。心当たりは・・・？

市原　実験室の換気扇を疑っています。ちょうど細菌部の牛小屋の方向に向かっていて・・・。

浦井　・・・さきほど、病毒部の牛は、鼻腔内に病原体を直接噴霧したといいましたね。

市原　はい。
浦井　でも細菌部の牛は、人工的に感染させることなしに感染した。
市原　そうです。
浦井　しかも人的な交流がないから、換気扇から排出された菌が風などで運ばれた可能性が高い。
市原　はい。
浦井　人に感染する可能性は。
市原　いまのところそういう知見はありません。
浦井　なるほど。いいですね。
市原　でもまだはっきりとこちらの実験との因果関係が証明されたわけでは。
浦井　それは、もちろん検証が必要です。
伴野　しかし、それがもしできたら・・・・。
浦井　風向きを捉えて撒くだけで、牛疫の流行を人工的に作ることができる。
市原　そうですね。
伴野　実験のためには相当数の牛が必要になりますよ。
浦井　ええ。それはもちろん。しかし可能性がある。引き続き、進めてください。わたしは実験の方法について上と話してみます。
市原　わかりました。

浦井、退場。

伴野　まさか、牛疫の毒が兵器になるとはね。
市原　でもなんとなくわかってきました。
伴野　何が。

市原　発想の仕方です。常に証拠を残さないことを求められる。
伴野　まあ、そうだね。諜報活動の基本だ。
市原　牛疫は自然界にある病気ですからね。軍事攻撃と気づかれず敵に打撃を与えられます。
伴野　そのうち、人に感染する牛疫を作れと言われかねないな・・・。
市原　致死率が１００％の病気ですからね。人に感染させることができたら、最高の生物兵器になりますね。
伴野　完全犯罪、か。
市原　え？
伴野　いや。なんでもないよ。実験の準備を進めてくれたまえ。
市原　わかりました。

シーン１０　１９４３登沢研究所　タイプ室

働いている女性たち。と、大きな爆発音がする。

ゆき　きゃあっ。
古川　大きな声を出さないで。村田さん、織本さんをお願いしていいかしら。様子を見てきます。

出ていく古川。
琴江、ゆきを座らせる。

ゆき　なにかしら。大きな音だったわね。

琴江　ガラスが震えていたわ。
ゆき　怖いわ。

琴江、窓のほうに行く。

ゆき　何か見える？
琴江　・・・・煙みたいなものが・・・・。

ゆき、驚いて駆け寄る。

ゆき　・・・あれは４科ね・・・・。
琴江　そうね。
ゆき　消火器をもってらした・・・。走っていくわ・・・。
琴江　きっとなにかの実験が失敗したのね・・・。
ゆき　近頃とても多いのね。どうしても・・・爆薬や危険な薬剤を扱っているから。
琴江　ええ。
ゆき　このあいだも爆薬の点火剤が手についてしまっていたのを気づかなくて、技官の方が・・・。
琴江　そうね。深い火傷だったって・・・。薬剤の火傷はタチが悪いから。
ゆき　わたしたちが知ってるだけでもこれだけあるのだから、研究所全体だときっとたくさんあるんでしょうね。

古川が戻ってくる。

ゆき　どうでした？

古川　詳しいことはわかりません。ただ実験していて、ガスボンベを開けたとたん、爆発したらしくて。
ゆき　まあ・・・。

古川　こちらには危険はないそうです。お仕事に戻りましょう。
ゆき　お怪我された方は？
古川　いらっしゃるらしいけど、わたしたちには関係ありません。
ゆき　でも・・・・。
琴江　織本さん、お仕事に戻りましょう？
ゆき　もしもっと大きな爆発だったら、ここだって無事ではいられないですよね。
古川　じっさいはそこまでじゃなかった。窓だって、大丈夫だったでしょう。
ゆき　でも…怖い。
古川　怖くても！
ゆき　（大きな声を出されて気圧される）
古川　戦場はきっとこんなものじゃないわ。わたしたちが仕事をしないと、ここがそうなってしまうかもしれない。
ゆき　・・・・・。
古川　その書類、今日のうちに仕上げるように言われているの。大丈夫よね。
ゆき　・・・・はい。
古川　よろしくお願いします。

シーン11　1943　登沢研究所　研究室

山喜と桑沢が話している。

山喜　悪かったね。しばらく任せっぱなしで。
桑沢　いえ。おかげでじっくり取り組めました。そちらの実験は、どうでしたか。
山喜　まあまあ守備よくいったよ。ひと段落だ。で、どうだった。実験の結果は。
桑沢　そうですね。何通りか試してみて無色透明のモノはできましたが・・・匂いや味は・・・。嗅いだだけでも中毒症状がでるかもしれない劇薬なので・・・。
山喜　ましてや味となると・・・試しに舐めてみるわけにもいかないしねえ。毒物の研究はそこが難しいね。
桑沢　ただその中でもアセトンと組み合わせたものが、有望なのではないかと思っています。
山喜　ああ。そうだろうね。液体だから水にもアルコールでも混ぜ込めそうだし。
桑沢　はい。よく溶けてしっかり混ざりますね。
山喜　ただ・・・長く置いておくと青酸が抜けるんじゃないの。
桑沢　その件なんですが、注射器のアンプルに入れれば、持ち運び可能なのではないかと。
山喜　なるほどね。効果は？青酸カリに比べてどうなの？
桑沢　中毒症状の出方は、青酸カリと同じですが、確実性はずっと高いはずです。
山喜　どれくらい？
桑沢　直接注射できれば、５倍から１０倍程度。経口でも・・・２倍は期待できますね。
山喜　致死量は・・・。
桑沢　ネズミでしか実験できていないので・・・・。
山喜　それは確かに。効き目が出るまでの時間は・・・。
桑沢　青酸カリよりは遅いハズ、くらいしか。
山喜　まあ、そうだよねえ。それも実験しないとデータが出ないよね・・・（しばらくデータを見て考えているが）犬とかもう少し大型のもので実験してみるしかないのかな

2022.05.28 up

桑沢　どうしましょうか。
山喜　浦井少佐に報告してみるよ。いずれ実験は必要だから。
桑沢　わかりました。
山喜　いつでもできるように準備は進めておいて。
桑沢　そういえば、ガスの事故の方、亡くなったそうですね。
山喜　そうらしいね。全身火傷で・・・まだ２０歳だそうだ。これからっていうときにね。
桑沢　そうですね。
山喜　自分の身は自分で守るしかないね。桑沢くんもくれぐれも気を付けて。
桑沢　・・・はい。

シーン１２　１９４３　登沢研究所　伴野の執務室

執務している伴野。
入ってくる浦井。

浦井　少しお時間いいでしょうか。
伴野　なんでしょうか。
浦井　まずは牛疫の、実験ですが。
伴野　はい。
浦井　朝鮮半島で行えないかと打診したところ、釜山にちょうどいい場所があるとの知らせが来ました。そこで行おうかと。
伴野　釜山ですか。
浦井　はい。三角州で、比較的平坦な場所らしいです。近くに家畜衛生研究所があるので、牛の手配や運

搬も都合がいいと。
伴野　ああ、それはいいかもしれませんね。
浦井　市原さんにはいってもらわないと話が始まりませんが、爆破担当として陸軍からも何名か随行してくれるそうです。
伴野　わかりました。今度、市原含めて、陸軍のほうと打ち合わせをさせてください。そんな何回もできる実験ではないので、慎重にやらないと。
浦井　そうですね。
伴野　あとは？
浦井　なんですか？
伴野　まずは、とさっきおっしゃった。
浦井　ああ。そうでしたね。本題は、むしろこちらです。今度、南京に行ってきていただきたい。
伴野　・・・・え。それはもしかして・・・・。
浦井　はい。そろそろ実験の手筈が整ったということで・・・。
伴野　・・・そうですか・・・・。
浦井　先日、ネズミでの実験に立ち会いました。実戦レベルではないかと判断し、現地に手配を急がせました。
伴野　・・・・・出発は。
浦井　一か月後です。
伴野　・・・・承知しました。
浦井　こちらは、伴野さんにも同行していただきたい。
伴野　はい・・・それは、そうしないといけないですね。
浦井　よろしくお願いします。
伴野　今更なのですが。

浦井　なんですか。
伴野　市原と桑沢、担当を逆にしてはどうか、と思っているんですが。
浦井　それはなぜ。
伴野　南京と釜山、両方、重要な実験であることにかわりはないのでしょうが・・・。
浦井　桑沢研究員になにか不安でも。
伴野　不安というほどのものではないのですが。
浦井　たいへん優秀だとお聞きしています。
伴野　しかし、その、過酷な実験になるのではないかと・・・・。
浦井　アッツが玉砕、ラバウルも孤立し、時間の問題です。中国を死守しなければ。すべての秘密戦を・・・一気に開始したい。これが上の意向です。引継ぎをする時間はありません。
伴野　・・・・・。
浦井　南京には、わたしも同行します。
伴野　・・・・わかりました。

シーン13　1943　実験地

真ん中に村田琴江。タイプしている。
琴江をあいだにおいて対称位置に市原と桑沢。伴野、山喜、浦井もいる。

市原　5月、登沢からはわたし他5名、陸軍技術研究所から爆破部隊6名、計11名が、船で釜山へと向かいました。協力を仰いだ釜山憲兵隊が、実験地に前乗りし、風向き、気温、湿度等の状況を観測してくれていました。
桑沢　5月、わたしは、浦井少佐、伴野科長、山喜研究員含む7名で長崎港を出発。上海を経由して、南

京へと向かいました。南京では、石井四郎軍医率いる関東防疫給水部、通称７３１部隊がわたしたちを出迎えました。

市原　手配された牛は１０頭でした。実験当日は天気がよく、ほとんど風もありませんでした。牛たちは、これから自分たちが実験の当事者になることも知らず心地よさそうに草を食んでいます。遠くに霞んで海が見えました。

桑沢　実験の場所としては、国民政府軍が遺棄した病院が指定されました。ここでわたしたちを待っていたのは死刑が決定している中国兵捕虜、１０名でした。石井部隊の人たちは実験対象となる捕虜を暗号で丸太（マルタ）と呼んでいました。

市原　陸軍の爆撃担当者の指示で病原体を粉末にしたものをセットしました。これを花火のように打ち上げて、繋がれた牛のうえで爆発させるというのが今回の実験です。鼻腔での感染が確認できていたので、鼻で吸引させる必要がありました。

桑沢　私たち６人は青酸ニトニールを口から摂取させる組と、注射で投与する組に分かれました。実験すべきことは、致死量、青酸カリとの経過の違い、そして味についてです。

市原　牛疫の病毒は晴れた空につつがなく打ち上げられ、牛の頭上で破裂しました。杉の花粉に似た灰かに黄色い粉が牛たちの周りでふわりと舞いました。わたしたちは、牛がしっかりと鼻でその粉を吸引することを確認しました。

桑沢　結果は、ほぼ事前に予想した通りとなりました。

市原　牛疫は強い感染力を持ち、発症したら致死率１００パーセントという疫病です。

桑沢　私はマルタに味はしたか、と尋ねました。通訳が、少し青臭いがほぼ味はしない、と、言っているとわたしたちに伝えました。

市原　３日後、すべての牛に４１℃から４２℃の発熱症状がみられました。ちなみに牛の平熱は、３８℃から３９℃です。

桑沢　２〜３分でマルタに青酸中毒の兆候が表れました。

市原　口の中に潰瘍ができ、激しい下痢症状が現れました。食べ物は受け付けず、ただじっとうずくまっています。
桑沢　マルタたちは息苦しさを訴え、やがて嘔吐と痙攣が始まります。
市原　牛たちは背中がえびぞりになり、激しく苦しみだしました。
桑沢　わたしはマルタたちの様子を時計をみながら記録していきます。
市原　そして、１週間の後、すべての牛が死に至りました。
桑沢　マルタは、多くの場合、３０分以内に死に至りましたが３日ほどかかった人もいました。しかし、毒の効き方としては、青酸カリよりは若干遅いという程度で、期待にはまったくおよびませんでした。致死量は１グラムということで決定しました。
市原　わたしたちの実験は一回で成功のうちに終わりました。なのでその後、実験がおこなわれることはありませんでした。
桑沢　すべてが終わり浦井少佐が。
浦井　成功です。いい成果でした。
桑沢　と言いました。
市原・桑沢　あとにはただ１０の死が横たわっていました。

市原、桑沢、いなくなる。
前を見る琴江。

シーン１４　２００１年　北京　ホテルのラウンジ

上着を着ると琴江は遥子となる。
王が目の前に座っている。

伴野が少し離れた場所で、原稿を書いている。

遥子　村田琴江さんが提出したタイプ原稿の中に当時在籍していた方の名簿がありました。高校生たちは、その名簿をひとりひとり調べました。企業の要職についている方が多かったので、思ったよりは容易く見つけ出すことができました。そして、ついに伴野さんにまでたどり着いたのだそうです。

王　すごいもんだね。最近の高校生は・・・。

遥子　高校生たちが訪ねていくと、伴野さんは、もう仕事は引退してらして、ほとんど隠居という生活を送っていました。登沢の話を聞きたいと目的を告げたところ、帰ってくれ、と烈火の如く怒りだしたそうです。

王　そりゃそうなるだろうね。

遥子　でも、その子たちは諦めませんでした。伴野さんが畑を作っているということを聞きつけ、手伝いに参じました。夏休み、毎日のようにやってきて雑草を抜いたり、茄子を収穫したりしている高校生たちを見て伴野さんも心持が変わったのでしょうね。冷たいものでもと家に招き入れ、お菓子と飲み物を出して、静かにこういわれたそうです。

伴野　今まで誰が訪ねてきても登沢のことは話してこなかった。でも君たちは若い。君たちには、話さなくてはいけないね。

王　年寄りになるとね。語りたがりになるんだ。わたしがいい例だよ。

遥子　（笑って）おかげで助かっています。

王　あのひと、どんな話をしたんだ。

遥子　最初は当り障りのない話を。消えるインキのこと、鞄に仕込んだカメラ、盗聴器・・・。

王　背広にカメラを仕込む研究の手伝いをしたことがある。あれは・・・まあ愉快だったが・・・。高

2022.05.28 up

校生もさぞ喜んだろう。

遥子　そうですね。登沢の研究は・・・誤解を恐れず言えば・・・心躍るものが多いですよね。

王　そうそう。科学者にとってはね。遊んでいるのに金がもらえるようなものでしたよ。

遥子　そうですね。偽札作りとか。

王　偽札？

遥子　はい。軍部にとって、最重要機密だったとお聞きました。

王　偽札で何をするつもりだったんだ。

遥子　まずは戦地での物資調達ですよね。それと、偽札を使って一気に貨幣の流通を増やすことによって人工的なインフレを作る・・・。

王　すごいことを考えるものだなあ。

遥子　知らなかったですか？３科がそういうところだってことは。

王　３科は秘密中の秘密、秘密の研究所のなかでも特別な秘密研究だったんだ。伴野さんも研究所にいた時分は知らなかったんじゃないかな。

遥子　はい。そうおっしゃってました。国際法違反の重要犯罪だからと。

王　ふうん。偽札作りなのか・・・それが細菌兵器より最重要機密だっていうのは・・・人っていうのはどこまでも傲慢だな。

遥子　傲慢ですか。

王　そう思いませんか。

遥子　・・・捕虜の命より、国の保身のほうが最重要の機密事項だったってことがですよね。

王　酷い話ですよ。とは言え、インフレも、細菌兵器も無差別だってことは変わらんがね。それこそインフレは効き目が遅い猛毒ではあるのだが・・・。

遥子　経済が、人を殺す。

王　そうそう。殺しますね。盛大に殺す。

遥子　伴野さんが高校生たちに石井部隊の話をされたとき、こんなに静かに人は人の話を聞けるのか、と思ったそうです。

王　高校生にしたのか。あの話を・・・・。

遥子　後世に人体実験のことを残さなければ、と思ったんだと思います。その気迫はきっと伝わった。中心になっていた生徒は、涙を流しながら、「話してくださってありがとうございます」と言ったと聞きました。

王　・・・・・・。

遥子　わたしは高校生たちのことで取材に行って・・・何度か通ううちに、原稿を託されました。

遥子、伴野のそばに歩み寄る。

伴野　実はどこに出すあてもなくこれを書いていた。出版してもらうわけにはいかないか。

遥子　必ず出版致します。

伴野　ありがとう。頼みます。

原稿を受け取る。伴野退場。

遥子　そして、出版の目途が立ち、後書きを送っていただいたんです。受け取りました、とご連絡したら奥様が出られて・・・亡くなったと。

王　悪かったんですか。体が。

遥子　はい。ガンがずいぶんあちこちに転移していたそうです。

王　ふうん。死ぬ前に書き残したかったのかな・・・伴野さんらしくもない。

2022.05.28 up

遥子　その原稿は、石井部隊の実験について、実際にかかわった方が事実と認めた記録でした。とても貴重なものです。

王　よく石井部隊のことは、捏造だ、そんな事実はなかったといわれるけど、実際はあった。青酸ニトニールだけではない。毒ガスやペスト菌などの実験でたくさんの捕虜が犠牲になったんだ。

遥子　王さんも参加されたんですか。

王　さあどうだろう。

遥子　・・・・・・・。

王　どちらにしても、わたしは中国で戦後を生きたからね・・・・。いろいろな話を聞いたよ。

遥子　・・・・・・・。

王　いまね。ここにいるのは若いひとたちばかりだ。だから呑気にこんな話をしていられる。しかしね。わたしと同じくらいの年の人がいたら、話す内容に気を付けなくてはいけないんだ。

遥子　それは・・・・・。

王　日本語がわかるんだよ。かつて満州国があった。北京にも王様のような暮らしをしている日本人がたくさんいたんだ。

遥子　・・・・・・・・。

シーン15　1943　登沢研究所　図書室

調べものをしている桑沢。
と、そこに市原が入ってくる。

市原　ひさしぶり。

桑沢　ああ。そうだね。
市原　・・・南京に行っていたと聞いたけど。
桑沢　市原もどこか行ったんだよね・・・。
市原　釜山に。
桑沢　へえ。どうだった。
市原　いいところだったよ。海が近くて。
桑沢　いいな。海か。（窓の外を見て）・・・夏だね。

間。

市原　桑沢、家業は肥料を扱っているんだっけ？
桑沢　そうだね。
市原　継がないのか。
桑沢　いずれは継ぐよ。でも、登沢で人を探していると聞いて、帝大で学んだことを生かしてみたい気持ちが押さえきれなくなってね・・・。
市原　へえ。
桑沢　それに、うちのあたりは、ちょっと土壌が農業に向いてなくて・・・長期的に農業を考えるために、土作りを、学ぼうと思ったんだけど・・・・。

間。

桑沢　今思うと、ずいぶん甘いことを考えていたな。

間。

市原　・・・ぼくは牛だ。
桑沢　・・・・・え？
市原　健康な牛をわざわざ伝染病にして殺してきた。
桑沢　・・・・・・・。
市原　聞きたかったんだろ。
桑沢　そんなことは・・・・・。
市原　人間か？
桑沢　・・・・・は？
市原　図星みたいだね。
桑沢　やめろ。
市原　南京なら捕虜がいる。
桑沢　やめろと言っている。
市原　わざわざ南京まで行く。それ以外に考えられない。

椅子が倒れガチャンと大きな音がする。

桑沢　だからなんだ！だからなんなんだよ！

桑沢、市原に殴り掛かる。
声を聞き、飛び込んでくる山喜。

桑沢　捕虜だからなんだって言うんだよ！
山喜　やめたまえ！

山喜、羽交い絞めにして止めるが、桑沢にはじき飛ばされる。
勢いが止まらない桑沢。
なにか叫びながら市原を殴ろうとする。
と、浦井が入ってくる。遅れて伴野。
浦井、スッと銃を構える。
市原、桑沢、止まる。

伴野　浦井少佐、これはわたしの監督不行き届きです。任せていただくわけには・・・。
浦井　・・・・本来であれば、厳重な処罰の対象です。
伴野　わかっています。
浦井　（市原と桑沢に）あなたがたはたまたま学問が優秀だったからここにいる。同じ年くらいのひとたちは、皆、最前線で、生きるか死ぬかの戦いをしています。彼らを蔑むおつもりか。
桑沢　・・・そんなつもりはありません。
浦井　では彼らに、たかが１０名の捕虜のことで、心を痛めているなどと言えますか。
桑沢　・・・・・・。
浦井　（伴野に）いったんお任せします。

浦井、スッと行ってしまう。

市原　・・・・・・・。

伴野　・・・たしかに、傲慢と言われれば返す言葉がないな。
山喜　え。どうしてですか。
伴野　前線にいる人たちからしてみたら、良心の呵責なんてことで悩んでいること自体、余程のヒマ人だと思うんじゃないか。
山喜　まあ、確かに。え。これ、そういう話なんですか？
伴野　浦井少佐が言ったのは、そういうことだよ。
桑沢　・・・少し青臭いが、味はしない。
山喜　え。なに。
桑沢　そうマルタは言ったんだ。自分を殺す毒の味が最後の言葉になる・・・前線で撃たれるのと・・・・どっちがいいか。
市原　・・・そんなこと、知ってどうなる。
桑沢　・・・・・。
市原　南京だけで何十万という中国人を殺した。その人たちひとりひとりにどっちの死に方がいいですか？とでも聞き歩くのか。
桑沢　・・・・・・。

と、ものを落とす音がする。

伴野　誰ですか？

書庫から琴江が出てくる。

伴野　いつからそこに？

2022.05.28 up

琴江　新しい本が来たので整理を頼まれて・・・・出るに出られず・・・。
伴野　行きなさい。ここで聞いたことは誰にも言わないほうがいい。
琴江　・・・なぜ・・・マルタなんですか？

誰も答えない。桑沢が顔をあげ。

桑沢　暗号だよ。
伴野　桑沢くんやめたまえ。
桑沢　実験するための人間が必要になると、収容所に伝えるんだ。何月何日までに、マルタ・・・何本手配頼みたし・・・。

琴江、足の力が抜け、床に座り込んでしまう。
桑沢、出ていく。
慌てて追いかける山喜。
伴野、やや考えているが、

伴野　あとで、わたしの部屋に来るように。
市原　わかりました。

伴野、去る。
しばらくの沈黙。

市原　・・・・あのあと、何回か、休みのたびにあの喫茶店に行ってみたんだけど。

琴江　え・・・。
市原　もしかしたら、村田さんも気に入ってくれたかもしれないと思って。
琴江　・・・今、そんな話は・・・。
市原　必要です。たぶん。
琴江　・・・・・・・・。
市原　映画は？
琴江　・・・親に禁じられました。
市原　そうですか。
琴江　・・・休みの日はずっと縫物をさせられています。
市原　それは、ずいぶん横暴だな。つまらない休日だ。
琴江　はい。つまらない休日です。
市原　なんというか・・惜しいね。村田さんのようなひとがそんな休日を過ごしているのは。
琴江　・・・・今は誰も、面白く休日を過ごすなんてできません。
市原　確かにそうだな。あの店も、ついに代用コーヒーですら飲めなくなった。
琴江　代用コーヒー？
市原　大豆とか百合根とかを煎って、粉にして・・・。
琴江　そんなことができるんですね。
市原　できるかできないかで言えばできるけど・・・・信じられないくらい不味い。
琴江　・・・・そうですか。
市原　科学の力を役立てようと、ずいぶん協力したけど、ダメだったね。
琴江　・・・・・・・。

間。

市原　興味あるでしょう。代用コーヒー。
琴江　・・・・・・あります。
市原　やっぱり。

間。

市原　ほんとうに科学に向いてるんだな。あなたは。
琴江　え？
市原　あんな話を聞いたあとでも、実験と聞けば心が少し上向く。上向いてしまう。それが科学者です。
琴江　・・・・どうかしてます。
市原　ほんとだね。
琴江　代用してもコーヒーが飲みたい・・・・人間を丸太何本と数える・・・それでもやっぱり実験がしてみたい・・・こんな恐ろしい心を抱えて、わたしたち、どこに行くんでしょうか。
市原　・・・・・・。

古川と織本が入ってくる。
木箱にモノを詰め始める。
市原退場。

シーン16　1944　登沢研究所　研究室

木箱に、実験器具を詰めている古川、琴江、ゆき。

声をかける伴野と山喜

伴野　おつかれさま。
古川　このあたりは、ぜんぶ伊那に持っていくということでいいんでしょうか？
伴野　ああ。そうだね。
山喜　いよいよ登沢も疎開ですねえ。
伴野　だいぶ前から場所は探していたんだが・・・。
ゆき　学校の教室をお借りするんですよね。
伴野　ああ。水道もあるし、なんとかね。研究の環境を確保できそうだ。
古川　山喜さんも伊那に行かれるんですよね？
山喜　いや。わたしは、一科に転籍になって・・・・。
古川　え。そうなんですか。
山喜　千葉のほうに行くことになるかもしれない。
古川　そうですか。
山喜　古川さんは。
古川　わたしは、伊那に行かせていただこうと思っています。
ゆき　え。そうなんですか？
古川　ええ。誰かひとり女性も来てほしいと言っていただいて・・・。
伴野　助かるよ。向こうで探そうと思ってもタイプを打てるひとはいないだろうからね・・・。
ゆき　それは・・・なかなかできることではありませんね。
古川　仕事を続けたかったんです。助かったのはこちらのほうです。
山喜　村田さんと織本さんは。
琴江　わたしは、こちらで残務のお手伝いを致します。

ゆき　わたしは・・・これを機会に、退職させていただこうと・・・。
山喜　それぞれだね・・・。
伴野　あとは私たちがやるから、自分達の仕事に戻ってください。
古川　ありがとうございます。（琴江とゆきに）行きましょう。
ゆき　はい。

出ていく古川、琴江、ゆき。

山喜　本土決戦も時間の問題というのはほんとうでしょうかね。
伴野　ああ。軍部の人たちも顔色がいいとは言えないね。
山喜　そんななか、いったい伊那くんだりでなんの研究をするんですか。
伴野　起死回生の兵器開発だね。山喜くんもだろう。
山喜　はい。ふ号兵器・・・しかし。材料と資金がこうも枯渇していては。
伴野　千葉へはいつ？
山喜　すぐにでも来てくれとは言われているのですが、まあ、もう少し。
伴野　いいのか。
山喜　行っても向こうでぼくができることはそんなにないんですよ。
伴野　ほんとうに打ち上げるつもりなのかな。
山喜　まもなくですね。このあいだ見てきましたが・・・。ふ号兵器なんて言えば勇ましいですが、見た目はただの熱気球ですからね。なんだか長閑なものでしたよ。
伴野　あれが太平洋を渡ってね・・・アメリカ本土で爆発するんだろ。
山喜　守備よくいけばそうなりますね。
伴野　山喜くんは搭載物の担当だったね。

山喜　そうですね。細菌の類を積み込んで、爆発と同時にまき散らしたいということみたいなんですが・・・・。

伴野　もしかしてペストノミか。

山喜　おかしいとは思っていたんです。もう青酸ニトニールはいい。ペストノミをやってくれと突然言われて・・・。もともと石井部隊は人、登沢は動物と担当が決まっていたはずなのに・・・・。

伴野　戦局が行き詰ってきたからね・・・

山喜　とはいえ、まだまだ実践できる段階ではないですね。なのにノミを空中からバラまいてペストを大流行させたいって・・・。

伴野　そのためには確実にふ号兵器が、アメリカ本土で爆発しないとならないな。誤爆は許されない。そんなこと、できるのかね。

山喜　わたしもそう言ってはみたんですよ。

伴野　なんと答えた。

山喜　できるかできないかじゃない。やるかやらないかだ。

伴野　・・・・なるほど。

山喜　勇ましいのはいいことですが、まったく科学的じゃない。

伴野　確かに。

山喜　しかもノミは人種関係なく噛みますからね。石井部隊でもだいぶ感染者が出てましたし。

伴野　まずはちゃんと海を渡れるのか検証しないとな。

山喜　はい。そうですね。

伴野　こっちは、それでなくても山喜くんを取られて汲々としてるっていうのに・・・。

山喜　伊那は行ってみたかったですけどね。しかし、命令には逆らえません。

伴野　まあそれだけふ号兵器に期待を寄せているってことだな。

山喜　ふ号兵器は大日本帝国の切り札です。全ての戦局をひっくり返すと息巻いていますよ。

2022.05.28 up

伴野　熱気球でね。
山喜　はい。戦局を。
伴野　それはなかなか痺れるね。
山喜　いろんな意味で痺れますね。
伴野　いよいよ特攻も始まるらしい。
山喜　え。そうなんですか。
伴野　ああ。飛行機ごと敵艦に体当たりすると聞いたときにはなんの冗談かと思ったが・・・。
山喜　飛行機一台で空母を破壊できるんならいいですよ。でもそんなの無理でしょう。相手は鉄の塊だ。いったい何台戦闘機が必要になるか・・・。計算しなくてもわかりそうなもんです。
伴野　そうそう。かかる費用に対して効果がね・・・。
山喜　なんとか目にものみせてやりたい思いでいっぱいなんでしょうね。しかし、敵をやっつけるより先に、飛行機が足りなくなりますよ。賭けてもいい。

箱を持ってふたり退場。

シーン17　2001年　北京　ホテルのラウンジ

向かい合って話している王と遥子。

遥子　・・・いまのわたしたちが考えている以上に、国は焦っていたんですね。
王　そりゃそうだよ。わたしのような末端の研究者でさえ、正直もうこれは無理だろうと思っていた。
遥子　どんなときにそれを感じましたか。
王　学徒動員というのが始まって…小学生くらいの子供たちが登沢にも働きにくるんだ。何をさせてい

たと思う。
遥子　想像もつきません。
王　手榴弾作りだよ。
遥子　え。それはほんとですか？
王　もちろん子供たちには、君たちが作っているのは手榴弾だとは言わないよ。でも見る人が見れば一目瞭然だ。
遥子　・・・・子供たちが人を殺すための道具を・・・わたしの考えている戦争なんてまだまだ甘っちょろいものなんですね。・・・。
王　亡国って言葉はああいうときのためにあるんだと思ったよ。
遥子　人間魚雷を作っていたという女性にお話しを聞いたことがあります。上品な老婦人で・・・その方がおっしゃってました。人が乗るものだなんて考えもしなかった。不良品を出さないだけで必死だった・・・と。子供が作る手榴弾と一緒ですよね・・
王　しかし不思議だね。人はそういうときに、このままで終わってなるものかと思うようにできてる。それが手榴弾になったり人間魚雷や特攻になる・・・。
遥子　とくに男の方は、そうですよね。
王　お。言いますね。
遥子　パチンコってご存じですか？
王　ええ。もちろん知っていますよ。こちらでは厳格に禁止されてますがね。
遥子　男性と女性では回収率が、まったく違うそうです。
王　へえ。
遥子　男性は２５パーセント。女性は７５パーセント。
王　ああ。女性は勝ったところで辞められるから、ですか。
遥子　正解です。もし負けたとしても後悔のないところで辞めることができる。

王　まさにあの当時がそれでした。有り金を全部つぎ込むような戦い方が始まっていた。
遥子　はい。
王　未熟な技術も、ぜんぶぶち込んでやれと、日本各地に研究員たちが送られていった。
遥子　足掻いて足掻いて・・・・まるでアリジゴクですね。
王　そうだね。

シーン１８　１９４４　登沢研究室　タイプ室

古川が書類をまとめている。
入ってくる琴江。

琴江　おつかれさまです。
古川　あら村田さん。ひとりでたいへんになると思うけど、よろしくお願いします。
琴江　伊那へは明日？
古川　そうね。タイプの機械が心配なので、移送の車に乗せていただこうと思っているの。山道だから、せめて抱えていくわ。
琴江　凄いですね。
古川　え。そうかしら。
琴江　（笑って）古川さんの責任感を見習おうと思っているんですが、いつもわたしの考えのはるかうえをいかれるので・・・。
古川　だってあれが壊れたら、わたしわざわざ伊那まで行く意味がなくなってしまう。
琴江　・・・あの。なんで伊那に行かれることにしたんですか。
古川　・・・・・・・。

琴江　聞いてはいけなかったでしょうか。
古川　皆さん、ここに入るのにはずいぶん厳しい身辺調査があったでしょう？
琴江　はい。そうらしいですね。試験に受かったあとも興信所のようなところが調査していると聞いたことがあります。
古川　働く必要もないようなしっかりした家のお嬢さんしか働けない場所なのよ。本来ここは。
琴江　えーと・・・・あの・・・・。
古川　わたしはね。いわば裏口入学なの。母が、陸軍の・・・偉いひとの、お妾さんだったのよ。それで、口をきいてもらって。
琴江　そうだったんですね。
古川　だから必死で働いた。織本さんや村田さんに煙たがられても仕方ないと思っているわ。
琴江　そんなこと、ありません。
古川　いいのよ。気をつかわなくても。
琴江　いつか話してくれましたよね・・・。ここで働くならせめて銃がもう少し見える場所にって・・・・わたしほんとうにそうだと思って・・・一生懸命やりました。そしたら、ちょっと見えてきて・・・・見えないほうがよかったと思う日も多いけど・・・。
古川　・・・わたしもそう思うわ。
琴江　伴野科長に指名されて、伊那にいらっしゃるんですよね。
古川　それは、わたしが天涯孤独と知ってらっしゃるから・・・。
琴江　え。天涯孤独？
古川　父がなくなったの。父が残してくれた割烹をこの戦争の最中、守りきるのは難しくて、手放した。気抜けしてしまったんでしょう。母もそのあとすぐ。
琴江　そうですか・・・・。知りませんでした・・・こんな近くにいたのに・・・。
古川　なんの後ろ盾もなくなったわたしを庇ってくださって・・・ありがたいと思っているの。

2022.05.28 up

琴江　わたし、古川さんを尊敬していました。いまも、尊敬しています。
古川　そんな・・・・。
琴江　信じてください。
古川　ありがとう。
琴江　これからも、古川さんらしく・・・・。
古川　わたしらしいって何かしら。
琴江　タイプを抱き抱えて敢えてガタピシの山道を行く、です。
古川　いやだわ。ひどい。

ふたり、笑う。

古川　村田さんとは、ちゃんとお話ししたかった。
琴江　はい・・・わたしも。
古川　村田さん、あの時、言ったわね。わたしたちがガマンしようがしまいが、勝つときは勝つし、負けるときは負ける。
琴江　はい。いいましたね。
古川　そろそろおわりね。戦争も。
琴江　はい。たぶん。
古川　・・・・戦争が終わったら。
琴江　・・・・そうですね。

シーン19　1944　登沢研究所　研究室

浦井が、桑沢のところにやってくる。

浦井　桑沢さん。
桑沢　はい。なんでしょうか。
浦井　伊那ではなく、ハルビンに行っていただきたい。
桑沢　え。ハルビンですか？
浦井　はい。石井部隊が毒物の専門家を求めています。適任ではないかと。
桑沢　・・・・・・。
浦井　出発は２週間後です。
桑沢　・・・・・・。

と、激しく空襲警報が鳴る。
窓の外を仰く浦井。
足早に立ち去る。

ぼんやりとその方向を見る桑沢。

シーン２０　１９４４　登沢研究所　屋外

逃げ遅れ、植え込みのところでうずくまっている琴江。
そこに通りかかる市原。

市原　なにしてるんですか？こっちへ。

市原、安全そうなところに琴江を連れていく。

琴江　すみません。防空壕に行きそこねて・・・。
市原　いや。ぼくも逃げ遅れたクチです。
琴江　・・・・悔しい。
市原　え。空襲ですか？
琴江　あ、あれは新聞で見たＢ２９だ、と思ったら、足が竦んで、動けなくなりました。
市原　それはとうぜんそうなりますよ。え。でも悔しいって・・・。
琴江　自分にかぎってそんなことになるわけないって思ってたんです。

市原、思わず少し笑う。

琴江　酷い。
市原　すみません。確かに意外だな。
琴江　あんなに近くを飛ぶなんて・・・・。操縦している方と目が合ったような気がします。
市原　このへんは高台ですからね。
琴江　・・・そうですね。
市原　でも、たぶん、爆撃はないな・・・。
琴江　そうでしょうか。
市原　戻ってくる様子がない。
琴江　よかった・・・・。
市原　・・・ぼくは爆撃されないことが悔しいですね。

琴江　え。どうしてですか？
市原　だって、この研究所はたいしたことはやってないと、アメリカは判断したってことでしょう。
琴江　あ・・・。
市原　研究者としては悔しいですよ。
琴江　そうですね。ここ、撃ってくださいと言わんばかりの場所に立っているのに。
市原　作ったときは、こんな風に、敵がやって来る日を、誰も想像していなかったんでしょう。
琴江　わたしも・・・そうかもしれません。
市原　なんですか？
琴江　戦争が起こっているのは、もちろん知っていました。でも、ここが撃たれるかもしれないとなる瞬間まで・・・あのＢ２９を目の当たりにするまで・・・わかってるようでわかっていなかった。
琴江　兵隊に行かれた方も、戦死された方もまわりにたくさんいるのに・・・。
市原　ぼくも・・・人のことは言えないな。
琴江　でも戦争の研究をしていたんですよね・・・。
市原　そう。だから、タチが悪い。
琴江　わたしも、ワケもわからず、戦争を、記録していました。
市原　そうですね。毒物の名前や分量を・・・。
琴江　ただの記号だと思って・・・間違えないように必死にタイプしていました。
市原　村田さんも戦ったんですね。ここにある秘密の戦争を・・・。
琴江　・・・そう。戦いました。戦っていたんですね。なんの自覚もなく戦って・・・自覚もなく戦争に参加した・・・。でも、南京での実験の話を聞いてしまった日からは、さすがの鈍いわたしも、タイプのこの打刻ひとつひとつが、戦争を作っているんだなって・・・。
市原　あなたをそういう状況に置いたのは、ぼくたちです。すべてが秘密。秘密。秘密・・・・。
琴江　・・・・・・。

市原　誰しもが、銃で撃たれる瞬間まで、自分だけは撃たれないと思っているのかもしれないですね。
琴江　・・・そうかもしれません。
市原　だから人は戦争なんてものができる。
琴江　・・・・・・・・。

琴江、複雑な思いで、Ｂ２９が飛んで行った方向を見る。
と、琴江、何かを目でとらえる。

市原　どうしました？
琴江　あの研究室・・・・・。人が・・・・
市原　え？
琴江　おかしくないですか？なんだか・・・項垂れて・・・・。
市原　・・・・・・・・

琴江、事態を察し、口を押える。

市原　見ないでください。
琴江　・・・・助けないと・・・・・。
市原　見るな！

ふたりの目が梁から吊る下がっている桑島を捉える。
声にならない悲鳴をあげる琴江。

伴野の声。

伴野（声）　桑沢くんっ。

入ってくる伴野、山喜、やや遅れて浦井。
伴野、山喜、市原が、桑沢を下ろし、必死で声をかける。
浦井、桑沢の死亡を確認する。

伴野　警察を呼びますか？
浦井　ここは登沢研究所の研究室ですよ。
山喜　え・・・どういうことですか。
浦井　そこで研究員が自殺する。あってはいけないことだと思いませんか。
山喜　いや・・・でも現に桑沢くんは・・・・。
浦井　わたしは医師の資格があります。事故死ということで処理しますので、くれぐれも、外に漏らさないでください。
一同　・・・・・。

市原もそこに歩いていく。

シーン21　1944　登沢研究所

立ち尽くしている琴江。
駆け込んでくる織本ゆき。

取り乱し、泣きながら、琴江の手を握る。その尋常ならざる様子に。

ゆき　琴ちゃん。
琴江　どうしたの？ゆきちゃん。
ゆき　（泣きじゃくりながら）わたしのせいよ。わたしのせいなの。
琴江　・・・・どういうこと。
ゆき　わたし・・・桑沢さんに、いちどふたりで会えないか、と言われたの。
琴江　え。そうだったの？それで、お会いしたの？
ゆき　お断りしたの。許嫁がいるからできませんって。
琴江　それは、仕方ないことよね。
ゆき　でも・・・とても苦しまれたんだわ。だから・・・こんな・・・。
琴江　ゆきちゃんのせいじゃないわ。
ゆき　辛そうな顔をされてた。わかっていたのに！
琴江　会ってもなにもできないわ。そうでしょう。

おろされた桑沢を見下ろすように４人立っている。

浦井　このたびの件、桑沢研究員への監督不行き届きということで、こちらの責任者を退くことになりました。
伴野　え。それはわたしが取るべき責任だと思うのですが。
浦井　伴野さんには、伊那に行っていただかないといけませんから。
伴野　理屈が通らない。
浦井　理屈が通るか通らないかではありません。誰がどこに必要かです。

伴野　・・・・・・・・・。

琴江　ねえゆきちゃん。

ゆき　・・・・。

琴江　ここは戦争のための研究所だわ。

ゆき　そうよ。

琴江　わたしたちなのに、ここでどんな研究をしていたのかも知らないわ。

ゆき　・・・・・・・。

琴江　何年も働いてきたのに・・・・。

ゆき　桑沢さんは何をわたしに言いたかったのかしら。

琴江　わたしにもわからない。でも、自分の命を絶つほどの辛い任務だったのね。

ゆき　話を聞くくらいは、できたわ。なのに・・・・わたし・・・・。

琴江　・・・かえって残酷ということだってあるわ。

ゆき　・・・・・・・。

琴江　・・・・・・・・。

ゆき　ずるいわ。こんな気持ちを残して死んでしまうなんて。

ふたり呆然と抱き合う。長い時間。

琴江、立ち上がり、歩き出す。

シーン22　1944　路上

歩いている琴江。

待っている市原。
驚く琴江。

市原　すみません。驚かして。
琴江　いえ。なんでしょうか。
市原　桑沢の代わりに大陸に行くことになりました。
琴江　伊那は行かれないんですか。
市原　しばらくは帰れません。
琴江　・・・・そうですか。
市原　少しお話できませんか。
琴江　え？

腰を下ろす市原、琴江。

市原　桑沢はこちらで骨にして・・・ご両親が連れて帰られました。
琴江　そうですか。
市原　自殺とはもちろん言っていません。しかし、分かるんでしょうね。お母さまが、何度も何度も、こんなことをして申し訳ない、と謝られていた。
琴江　そんな、おかしいわ。
市原　そうですね。
琴江　桑沢さんは戦死です。
市原　・・・・・。
琴江　秘密戦を戦って、戦死された。違いますか。

2022.05.28 up

市原　そうなんでしょうね。
琴江　冷たいいい方されますね。
市原　あいつの下宿の整理に行ったら、日記みたいなものが残されていた。
琴江　・・・・・・・。
市原　毎日一行。今日も眠れなかった、とだけ、書かれていました。何日も何日もそれが続いて・・・・。
琴江　・・・・・お苦しかったことでしょうね・・・・。
市原　・・・・・・わからないんです。
琴江　・・・・・？
市原　なぜ服毒自殺じゃなかったんだと、そんなことばかり考えてしまう。
琴江　・・・・・・・・。毒を呑む資格もないと、思われたんじゃないんですか。
市原　・・・・・・・・・・。

間。

市原　桑沢は清廉潔白な男だったんでしょう。いや。そういう男でした。
琴江　・・・・はい。
市原　でも、秘密戦はね。自分の心はまったく清廉ではないと知り続ける戦争なんです。
琴江　・・・・・・・。
市原　秘密戦は、科学者の脳を沸騰させる戦争です。ぼくだって、ここにきてからずっと、ああ今日はよく眠れたなんて日は数えるくらいです。でもたぶんそれは、桑沢とはまったく違う。
琴江　はい。
市原　なんでこんな話をしているんでしょうね。でもあなたには、この話がわかるでしょう。
琴江　・・・・・・・・。

2022.05.28 up

市原　あなたは、桑沢が眠れない理由も、ぼくが眠れない理由も、どちらもわかってしまう人だ。違いますか。

琴江　・・・・それは、わかります。わかりたくないのに・・・わかってしまいます。

市原　だから、ずっとぼくはあなたと話しがしたかった。なのに・・・。

琴江　・・・・・・。

市原　戦争だから、男と女だから・・・・話せなかった。

琴江　・・・・あの。

市原　なんでしょうか。

琴江　玄米を煎って、粉にしてみました。

市原　え。

琴江　ずっと考えていたんです。どうすれば、少しはあの味に近づけるか。

市原　・・・・・・。

琴江　すり鉢で摺って、布で漉してみました。苦味はあまりなくて・・・でもよい香りでした。

市原　・・・・それは、飲んでみたいですね。

琴江　はい。桑沢さんにも、飲んでいただきたかった。

市原　・・・・・・。

琴江　・・・・帰ります。

市原　・・・・はい・・・・。

琴江　どうぞご無事で。

琴江、踵を返して、立ち去る。

その姿を見送る市原。

シーン２３　２０００　山喜へのインタビュー

山喜　ふ号兵器、後に風船爆弾と呼ばれた気球は、登沢の伊那への移転が完了した１９４４年１１月１日、いよいよ最初の砲撃を開始しました。この日が選ばれたのは明治天皇の誕生日で、晴れの日が多いとの統計によるものですが、実際は土砂降りでした。その長閑な形状から、登沢と言えば風船爆弾、役にも立たない兵器を必死で研究してた間抜けな集団というようなイメージを持たれていますが、実はこの作戦は、一定の成功を収めて終わります。すなわち、空爆としての被害は少なかったが、心理的な恐怖感を与えることに成功したということです。

遥子　そうなんですね。

山喜　そりゃそうでしょう。気球だ、と思ってみていたら、突然爆発するんです。しかも何個も。今でいう無差別テロに近い。得体が知れず恐ろしかったと思いますよ。

突然の閃光。
ラジオの声が新型爆弾の投下を伝える

シーン２４　１９４５　登沢研究所　８月８日

伴野が入ってくる。

伴野　やあ、元気でしたか。

琴江　お久しぶりです。伴野科長は、出張ですか？

伴野　（琴江の切り抜いている記事を指して）それのね。内閣と報道の話し合いがあって。立ち合いだよ。

琴江　そうですか。

伴野　東京は暑いね。

と、山喜が入ってくる。

山喜　ああ。伴野さん。
伴野　あれ。山喜くんはこっちにいるの。
山喜　はい。実行直前、天皇陛下が、細菌の搭載は許可できない、とおっしゃられてね。お役ごめんですよ。
伴野　（琴江をチラリとみて）おい。その話はまずかろう。
琴江　席を外しましょうか。
山喜　いやいや。いいよ。しばらく中野学校で教えていたんですが、やっぱりペストノミをやれ、と言われて。（琴江が切り取った新聞記事をヒラヒラさせて）ばかばかしい。こんなものに、よりにもよって気球爆弾で対抗しようとしていたとは。
伴野　・・・・・・・・。
山喜　敵に恐怖を与えることに成功した、なんて、浮かれていたのが恥ずかしいですよ。
伴野　・・・原子力爆弾だったそうだよ。
山喜　そうだろうな、とは思ってました。
伴野　トルーマン大統領が、発表したんだ。昨日、正式に。
山喜　じゃあ相当な被害なんてものでは済まないな。広島は壊滅状態でしょう。
琴江　それは・・・ほんとうですか？
伴野　ああ。まだ仔細はわからないが・・・・。でも2日たっても現地の様子がよくわからないくらいの凄まじい被害なのは確かだね。
山喜　なんですか。もう正体がわかっているのに新型爆弾って。おためごかしが過ぎませんか。

伴野　会議はだいぶ紛糾したよ。でも原子力爆弾という言葉は使わないということで報道各社申し合わせをしたんだ。
山喜　もしかして国民の戦意喪失を恐れて、ですか？
伴野　そうだね。
山喜　科学を制するものが制する戦争じゃなかったんですか。
伴野　ああ。
山喜　現段階で、科学に（記事を指し）これ以上があると思いますか？
伴野　ないだろうな。ひとり勝ちだ。圧勝と言っていい。
山喜　ならもう勝ち目はないって考えるべきでしょう。やる気を出してる場合じゃないですよ。
伴野　・・・・村田くん。
琴江　はい。
伴野　君はどう思う。
琴江　・・・・よくわかりません・・・・。
伴野　そうか。
琴江　でも原子力爆弾というのは、新しい爆弾なんですね。
伴野　ああ。まったく新しい考え方の爆弾だ。科学の最先端だよ。原子の運動を利用してね。このくらいの小さな爆弾で町ひとつ木っ端みじんにできるような。
琴江　広島が・・・・木っ端みじんですか・・・・。
伴野　おそらく一瞬で何万という人が死んだ。
琴江　そんな・・・・惨い・・・。
伴野　なんせ初めてのことだから何が起こるかわからない。・・・・生き残っても、いったいどんな影響が人体に出るか・・・・。しかし単純な火傷でないことは確かだ
山喜　ガンマ線を大量に浴びるわけでしょう。細胞が崩壊してくんじゃないですか。

琴江　細胞が・・・？
伴野　ふつうは、傷ができれば治る。ガンマ線は、その再生するための細胞を壊していくのではないか、と言われていて。
山喜　内臓も、細胞でできているわけだから・・・・。
伴野　だから・・・・生き残ったひとも、いま、地獄の苦しみのなかにいて、朽ちるように死んでいくのではないかとね・・・。
琴江　・・・どうせ負けるものなら、そんなことになる前に負けたかった。
伴野　・・・そうだね。

玉音放送が流れる。
じっと聞く３人。

シーン２５　１９４５　登沢研究所　資料室

慌ただしく書類を出している琴江。
ひとつの木箱で手が止まる。
ずっと取ってあった自分が打ったタイプの複写部分。
急ぎ足でやってくる織本ゆき。

琴江　ああ。ゆきちゃん。
ゆき　琴ちゃん。
琴江　どうしたの。
ゆき　登沢が大変だと聞いて、志願してお手伝いに来たの。これはどうするの。

琴江　ぜんぶ燃やすの。
ゆき　え。全部？
琴江　研究の痕跡をすべて消すのですって。進駐軍が・・・はやければ８月のうちに来るかもしれないからって・・・。
ゆき　そうなのね・・・。
琴江　男の方たちが焼却炉で、夜を徹して燃やしているわ。
ゆき　・・・・惨いことね。
琴江　お辛いと思うわ。
ゆき　そうね。・・・・あら、琴ちゃん、これ・・・・。タイプの複写。まだ取ってあったの。
琴江　これも捨てるしかない。ねえ。面白いわね。これ、わたしたちの青春よ。ゆきちゃん。
ゆき　ほんとうねえ。働いたわね。お国のために。

木箱を閉める琴江。
ゆき、テキパキと働きだす。

琴江　ゆきちゃんは、遠くにお嫁さんに行ってしまったんだと思っていたわ。
ゆき　・・・・亡くなったの。
琴江　え。
ゆき　許嫁は、南洋でね。戦死されたのよ。
琴江　そうだったのね・・・・。ごめんなさい・・・なにも知らなくて。
ゆき　琴ちゃんにだけはお手紙で知らせようと思っていたんだけど・・・。
琴江　いいのよ。そんなことは。でも・・・。
ゆき　なんども書こうとしたのよ。だけどうまく書けなくて・・・。

琴江　わたしも・・・便りのないのはよい証拠なんて勝手に決めて・・・心細かったわよね。ごめんなさいね。
ゆき　違うの。
琴江　なにが？
ゆき　わたし・・・あのあともずっと桑沢さんのことを考えていたわ。
琴江　・・・・・・・・・。
ゆき　誤解しないでね。婚約者を裏切って桑沢さんのところに行きたかったとか、そんな話ではないの。
琴江　そんな風に思うわけないじゃない。
ゆき　でもわたし、・・・桑沢さんの話を聞きたかった。
琴江　・・・・・・・・。
ゆき　聞いてもわたしには何もわからない。でも・・・わたしは・・・桑沢さんが分けてくれようとした苦しみを・・・・知りたかった。
琴江　・・・・うん。
ゆき　でもきっと・・・お話聞いてしまったら・・・あそこまで追いつめられるような苦しみのなかに、ひとりでおいていくなんて、できなかったかもしれない。それが怖くて見捨てた。そしたらひとりで・・・・・。あんな風に。
琴江　・・・・・・・。
ゆき　ずるい人だって恨んだわ・・・でもわたしもずるい。
琴江　そんなふうに思わないで。どうにもならなかったの。違う？
ゆき　わからない。わたしにわかるのは、桑沢さんも、許嫁も、死んでしまったってことだけ。

と、入ってくる伴野と山喜。

2022.05.28 up

琴江　（涙を払って）おつかれさまです。
伴野　織本くん・・・手伝いに来てくれたのか。
ゆき　はい。微力ですが。
山喜　ここはもう運んでいいのかな。
琴江　はい。大丈夫です。
ゆき　すべて焼却されるんですか。
山喜　ああ。もうぜんぶね。いっそこの研究所ごと焼いてしまえと思うが・・・。
伴野　これが、なかなか・・・火薬やら薬物やらがあるからね。焼くのもそれなりに慎重にしないと。
山喜　コツコツやってきたものを焼くために、こんな真夏に焚火して。せめて冬に負けたかったー。
ゆき　やだ。酷い。山喜さん、そんな冗談をおっしゃる方なんですね。
山喜　おっしゃるんだよ。これが。ここからは、せめて思う存分冗談を言って生きていきたいね。

と、浦井が入ってくる。

伴野　浦井さん・・・いらしてたんですか？
浦井　ここの事情をよくわかっているからと、命を受けまして、処分の指揮を執ることになりました。
山喜　それはいい。今指示を出しているひとが科学をしらなくて。
浦井　市原さんが、石井部隊から出奔されたそうです。
伴野　え。市原くんが。
浦井　はい。新型爆弾の報を受けて、しばらくは何か考えていたが、気が付くといなくなっていたと。誰か連絡を受けていませんか。
伴野　いや・・・いまのところは・・・。
浦井　そうですか。

山喜　なんだなんだ。あっちも焼却で大わらわの時だろうに。
浦井　そうですね。でもそれ以上に、業務の内容を仔細に知っている人が敵国にとらえられるかもしれないことが問題です。
伴野　・・・連絡があったらすぐ伝えます。
浦井　よろしくお願いします。

浦井、行ってしまう。

山喜　・・・・さて。運ぶか。

山喜、箱のひとつを抱えようとする。

琴江　待ってください。
山喜　なんだね。
琴江　（その箱を開けて）伴野科長。
伴野　ああ。
琴江　これは・・・・わたしがここで打ち込んだものの複写です。和文タイプは打ち込むと仕組み上、これがでてくるんです。普通は捨ててしまうものなのですが・・・わたしは・・・・記録と勉強のために保存していて・・・。
伴野　それがどうしたかね。
琴江　持ち帰ってはいけないでしょうか。
山喜　は。なにを言ってるんだね。君は。
琴江　たいしたものはないはずです。

山喜　そういう問題じゃない。
琴江　どこにも出しません。でも・・・わたしたちがここで・・・仕事をしていたってこと・・・ぜんぶなくなってしまう。だから・・・せめて、皆さんの分まで・・・・持っていたいんです。
伴野　（木箱に近寄り中を確認して）いいでしょう。
山喜　え。本気ですか。
伴野　村田さんの言うとおりだ。たいしたものは何もないよ。
山喜　いやー。しかしなー。
琴江　ありがとうございます。
伴野　わたしは明日、伊那に戻るから、今日、持ち帰りなさい。もし見つかったときに庇えなくなる。
ゆき　お戻りになるんですか？
伴野　向こうは向こうで、処分すべきものがある。古川さんが大奮闘してくれているようだが、やはり薬品類はね・・・。科学者の仕事だから。
琴江　・・・・・大切に保存します。
伴野　・・・・・お願いします。

琴江、頭を下げる。伴野、山野、箱を持って退場。

琴江　ねえ。ゆきちゃん。
ゆき　なに。
琴江　わたしもずるいわ。
ゆき　琴ちゃんは、ずるいって言葉からいちばん遠いひとよ。
琴江　・・・・あの時、親切で関わるほうが残酷かもしれないってわたし言ったわ。
ゆき　わたしもそう思ったわ。だからお会いしなかった。

琴江　でもやっぱりいちばん残酷なのは、なにもしないことね。自分を守って動こうとしないことだわ。
ゆき　・・・・・・そうね。そう思う。
琴江　・・・・・コーヒーを飲んでください、と言えばよかった。
ゆき　え。なに？
琴江　飲んでみたいと言ってくれたのに・・・・。
ゆき　・・・・琴ちゃん、もしかしてその方・・・・。
琴江　ここで何が起こっているのか、知りたいと思ってた。女だから知らなくていいって言われることが悔しくて・・・。でも・・・・わたし・・・・あの時、見てしまった。桑沢さんが・・・・窓の向こうで・・・しょんぼりと、叱られた子供みたいに項垂れて・・・・。
ゆき　・・・・・・(ギュッと琴江の手を握る)。
琴江　その人はそれをいっしょに目撃したの・・・・だから、あの時・・・言ってくれた。その姿をせめて分かち合いましょうと・・・・。男でも女でもなく・・・あなたは、それがわかるひとだと・・・・最初からずっと・・・信じてくれていたのに・・・・。
ゆき　悔しいね。
琴江　・・・・・・。
ゆき　応えたかったのでしょう？それができなかったこと、わたしまで悔しい。
琴江　でも・・・そんなふうに言われてしまったら、逃げたくなる・・・いえ。逃げたの。わたしたち、知りたいのかしら、知りたくないのかしら・・・戦争が終わって・・・どうなっていくのかしら・・・。

１９４５年がゆっくりと閉じていく。

エピローグ　２００１年　北京　ホテルのラウンジ

2022.05.28 up

向かい合っている遥子と王。

遥子　王さんは、市原さん、ですよね。
王　・・・・そうだとしたら。
遥子　わたしは、村田琴江の孫です。
王　・・・・・・。
遥子　祖母は持ち帰った書類を大切に保管していました。それで、出すかもしれないとなったときに、わたしに相談してくれたんです。そのときはじめて、祖母が登沢に勤めていたこともしりました。
王　そうですか。
遥子　そもそもわたしが科学を好きになったのは、祖母が・・・いろいろなことを教えてくれたからでした。小さなころから、家にあるようなもので、色水の実験をしたり、燃料電池を作ったり・・・。たまに失敗して、あらへんねえ、なんてとぼける祖母が面白くてわたしは科学に夢中になりました。
王　ずいぶん愉快に育ててくれたんですね。
遥子　はい。このうえなく愉快に。祖母は戦後、教師の資格を取って…中学生に理科を教えていたんです。そんな生き方を選んだ意味も、わたしは、その時知りました。
王　村田さんは、優秀なひとでした。いい選択をされましたね。
遥子　・・・祖母のこと、知らないと言いましたよね。
王　でも、わたしが知っていると、知っていたでしょう。あなたは。
遥子　・・・はい。
王　似ているなあ。その食えないかんじ。血は争えない。
遥子　え、似てますか？
王　物静かでね。でも、自分の意見はハッキリ言う人でした。
遥子　物静かですか？祖母が？

王　ええ。
遥子　だとしたら戦争は祖母の性格を変えましたね。
王　そうなんですか？
遥子　はい。賑やかで、いつも笑っていました。教えることが楽しくて仕方がないの、天職よ、と言って、生徒さんにも慕われていましたね。
王　へえ。想像がつかないな。
遥子　そうですか？
王　ええ。まったく。
遥子　そんな祖母が、いつになく、真剣な顔をして、ねえ遥子、わたしが勤めていた研究所では、こんなにたくさん毒物を買っていたのよ、と。これ提出してもいいものかしらって・・・。わたしは出すべきだと言いました。

王　わたしの消息はどうやって知ったんですか。
遥子　実は、山喜さんなんです。
王　え。なんで山喜さんがわたしのことを。
遥子　山喜さんは戦後、アメリカに渡られたんです。ＧＨＱから科学の知識を生かしてほしいと言われて。
王　へえ。
遥子　アメリカで探し出し、インタビューできました。登沢のことはいろいろお話聞けましたが・・・・それでも、今のお仕事のことは、ガバメントとの契約があるからと、詳しいことは聞けなくて。
王　え。でも、なんで・・・・。
遥子　中国でも同じように今も秘密戦を生きているひとがいる、と、ちらりとおっしゃって、食い下がってお名前と大学だけ・・・どうして知っているかまではなんとしても教えてくれませんでしたが・・・。
王　蛇の道は蛇ってことか・・・・。

2022.05.28 up

遥子　（カバンから古い手紙を出す）

王　・・・・・・・・。

遥子　これ、ちゃんと祖母のところに届いたんですよ。

王　・・・確かにわたしが預けたものです。日本に戻るという行きずりの人に・・・あの混乱の中、まさかほんとに届けてもらえるとは・・・。

若き日の市原が登場。手紙を読む

市原　新型爆弾が落ちたと聞いたとき、日本中の科学者が、この戦争は、もともと勝ち目のない戦いだったのだと悟り、無力感に苛まれたことでしょう。でもぼくが日本に戻らないことにしたのは、その無力感のせいではありません。あの瞬間、ひとつの爆弾で広島が壊滅したと聞いた時、ああ、科学で勝つのは自分でありたかったと、ぼくは確かに思ってしまった。ごまかしようのない自分の野心を見てしまったのです。あの爆弾は、倫理という意味で、おそらくは許されないものです。今後、どこかにまた落ちるということのないよう、願う自分も嘘ではない。けれど、たった一回であるものなら、この壮大なたった一回しか許されない臨床実験に立ち会いたかったと思う自分もまた嘘ではないのです。そういう科学者の業のようなものをかき集めるとあの新型爆弾になるのでしょう。ぼくは日本には戻りません。この心を抱えたままでは、戻れないとその時思ったのです。

若き日の市原、退場。

王　今思うと勝手ですねえ。その判断も・・・手紙も。若気の至りだな・・・。

遥子　祖母も、そう言って笑っていました。

王　そうですか。

遥子　・・・タンポポだそうですよ。
王　え。
遥子　いろいろやってみたけど、タンポポの根っこがいちばんいいって。
王　コーヒーですか。
遥子　はい。
王　へえ。
遥子　この手紙は、そのコーヒーをいちばん飲んでほしい人がくれたのよって。
王　・・・・そうですか。いや。年甲斐もなく、嬉しいですが・・・。
遥子　でも酷い。こんな恋文がこの世にあるものですか？
王　確かに。・・・でもあなたには、これが恋文だとわかるんですね。

と、ロビーのテレビのあたりがとつぜん騒がしくなる。
飛び交う中国語。

『テレビつけて』

王　(琴江に)テレビをつけろと言っています。

『なにがあったの』
『ニューヨークで飛行機が突っ込んだって』
『倒壊する・・・・』

遥子　あれ・・・・世界貿易センタービルですよね。

王　飛行機が２機、時間差で、突っ込んだと。そんな偶然はありえない。
遥子　・・・・・・テロでしょうか・・・・。
王　そうだろうね・・・・それしか・・・・。
遥子　これ・・・戦争になりますよね。
王　いまの想像があたっていればね。
遥子　・・・・それはまた、登沢研究所が必要になるということでしょうか・・・・。
王　いや。
遥子　え？
王　ずっと続いているだけです。中国にはある。アメリカにも・・・。ロシアにも・・・おそらく日本にもね。そして今、たった今、この出来事を受けて、世界中のスパイたちが一斉に移動を開始しているはずだ。
遥子　まるでマンガですね・・・。
王　まあねえ・・・あなたのおばあさんと僕が働いていた場所も、そうとうにマンガのような場所でしたけどね。
遥子　・・・でも、科学は、あのときより・・・・ずっと先まで進んでいます。
王　やる気になれば指先一本で、世界を滅亡させることもできるでしょうね。
遥子　けれど、人は・・・。
王　なにも変わっていない。科学の進歩に人が追い付くなんてことは、おそらく・・・不可能です。
遥子　王さん。いえ。市原さん。わたしが科学者にならなかったのは、科学の負の可能性に、負けない自信がなかったからです。わたしには（市原の手紙を指して）この手紙に書かれていることが、まるで自分の心を覗かれているように思える。
王　・・・・・・・。
遥子　でも・・・だからと言って科学を諦めたつもりはありません。科学には、明日は今日よりいいもの

かもしれないって思わせる力がある。未來の時間を信じさせる力が。わたしはそれを・・・その危うさまで見据えたうえで、文字にしていきたい。それを仕事にしようと思ったんです。

間

遥子　会社に、電話をかけてきます。もしかしたら明日にでもニューヨークに行ってくれと言われるかもしれません。

王　ああ・・・そうですね。どんな化学物質が悪さしてるともしれない。

遥子　はい。あれだけの事故です。科学の面からも検証する必要があります。

王　確かに。

遥子　電話をかけたら戻ってきます。あの・・・そしたら、餃子を食べに連れて行ってください。

王　お。いいですね。

遥子　せっかく、北京まではるばる来たので。

王　・・・旨いですよ。

遥子　はい。楽しみです。

遥子、携帯電話を手に出ていく。
その後ろ姿を眩しく見る王浩然。

終幕

2022.05.28 up

【主な参考図書】

「陸軍登戸研究所の真実」　伴繁雄　芙蓉書房出版
「私の街から戦争が見えた―謀略秘密基地　登戸研究所の謎を追う―」　川崎市平和教育学級編
教育史料出版会
「高校生が追う陸軍登戸研究所」　教育史料出版会
「謀略戦　ドキュメント陸軍登戸研究所」斎藤充功　株式会社時事通信社
「君たちには話そう　かくされた戦争の歴史」　いしいゆみ　くもん出版
「陸軍贋札作戦―計画・実行者が明かす日中戦秘話」　山本憲蔵　現代史出版会
「七三一部隊」　常石敬一　講談社現代新書
「戦時下の日本映画―人々は国策映画を観たか」　古川隆久　吉川博文館
「陸軍中野学校の教え」　福山隆　ダイレクト出版
「帝銀事件と日本の秘密戦」　山田朗　新日本出版社